寛放録

昭和五年四月上浣起筆

特別
千葉
1919
421

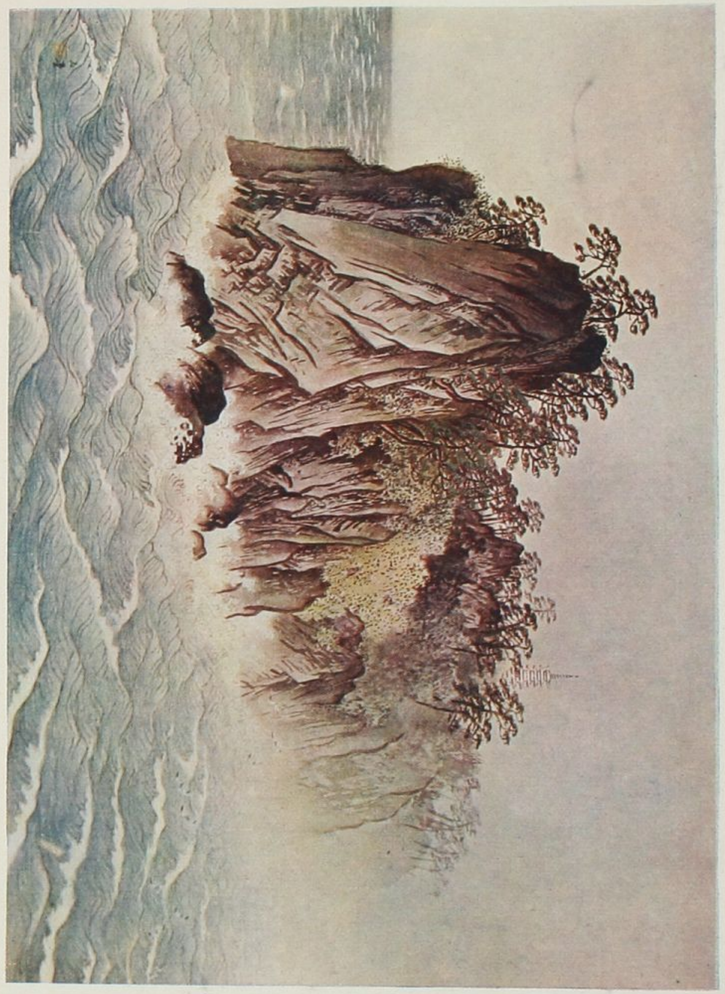
176686

寛成録四

昭和五年四月五日起筆

○此度稿本復製の事次第宅に集合次期複製すべき稿本の見本を新たに撰び出し爾四下部の稿類者、林若樹博の帯の珠藻を後編に深更に到る、寫目の主なるものあたの如し

林若樹博の国書の面白き珠玉書三點あり殊に初めて見る所也、中津侯の出版に係るあハ蘭和辞典二種日露会話一冊これ日本語を命じて大いに露西亞語を学ばしむるこゝの也



38 9207

Bantardt Recorden Book
1822 hakatsu
Inagataka
こんい表紙の大略まる和紙洋装本也此分ハ二冊
まる者うハ郎用集のことき記也中津藩ハ蘭
学の蘭学心得家ともすくなく藩主の
子まる此人も蘭学者の為也シーボルトの江戸ま
来りし時蘭学修ゆ者ハ此人也
Yutaura Boarden Book
こんも和紙洋装ちまる五冊也、こんハ蘭医)の和
蘭家宮吉ちう、巻頭ニ和文の序あり栄

複原製

亨と号す著書中津藩の藩ニ文化庚午の
版とあり

日震新字宮業の書　一冊

一千八百五十七年稲耕夫の著す所なり震都
ニ出版ス今日震宮典最古のもの也洋紙洋装
本也著者ハ掛川藩の侍ニて人を殺し今著めて
命ニて久しく震ニ来り長崎ニてヤマト夫と称
し日本の医学教授の職ニ就き震都ニ帰りし時此男
が建議ニて日本ニ来りて日本の法の後術を学ぶる
使の節をして不審かりもとといふ挿話もある後ハ
伺朝しなり
以上の三冊ハ今日極めて稀なるもの也

尚未摺の帯の図書の由称らしきもの

京都市術図

を刊年を聞けども寛永頃のものと思いうしたる

図多

西国大名旗印　一冊

こんい元禄の版なれども西国大名の船船と旗幟を

図しなるものも

右二冊は複製なれども原版と入ること

考なり

外と

殿様三十番合

課の本

複原製

二冊は模写ものなれども本文は寛永頃年江戸和泉屋

摺なれども出版もるものなれども一寸氣の利たるもの

なれども挿画をなくは相違なるべし

讀書

新伝説論　一冊

蜀史四巻は三伝の内の蜀史の印刷大人

の手稿也この人は幕府に奉仕しなる者

の三伝のものも巻にもれ俗名俗無文の説

論なり

説害新伝説論は蜀山人花月亭

東海山人の印刷大人の養子なる

と覚しくこれらは幸明岩読の載記

つを以て斯くと知られたき

後名位尊文記

とあり、此書は十二三枚の宮内文書にて膳宮文書と

借受け拙筆

尚其他の世帯本の内

大阪中諸宗寺々寺々立人犯刑形帳

の原書一冊あり、元禄八年九月各宗の住職の

印鑑を集め宗旨改めの原簿となりたる

中に契沖の印のあるのは珍らしかり真言

宗の部にも高野山寶性院寺曼荼

羅院と書きたる所に契沖の墨印あり、契沖

の沖の字は先師の説あり沖字にして

と云へと此印は正しく水の偏也沖と書くこと正

しき也

安田氏にも示されたる稀世の書なり田舎のしきものは

宮

草根集　二冊

こんりんの曲直瀬道三の印記あり日人の自筆本

と侍るなり、外に書名なき歌の春

満の自筆本二巻あり、春満の晩年代に侍り

之体同しからさんとも、中一く自筆と思いるもの

也

武悦本数種出し示されたる中に此本は

撰集抄　三冊

ゑ徒然草　宗本あり、不思議なる一本は定説

本の往古巻のこ倣ひなるべき五色紙雲母文様あ
る一書なり、書体の似たるを見れば比まんが頗る
り時代に下るものなり、文体も浜宮本などしたるの
ものなるべき巻の往古巻などが見れば見られる
あるもん歟

経巻の内の目録しきもの

法華経 零本三巻

こんの三十巻あるべきものなり其内に帳庭の
一乗寺にあるものは長寛元年の奥書
なり銀塔の中に一字ずつ金字にて書きたる紺紙
経なり平家経の式なり、金泥の色褪めおるに
情ちがへし唐あり年月いろいろの人が補修し

ることい巻端の表紙なるも多くは冬柴の首
は金泥にて書きたる佛書なり、その原のまま
なるものと、巻末に補ひたるものを補修したと
あるものとあり、もとい頃の装飾のものであれば
しく、表紙の表は金泥の装飾の脱ち
げたるものも見いる。首部は元のまま
なる佛画の存する一巻の表紙表は数り
の文字にて巻末五年茶屋宗部補修の
ことを記せり
外に出雲伊勢の小津家なる出し給ふ四方花平なる時
西荘文庫の印記あり、前田光悦本なる宮本津
山花なるが、巻末に堆積の巻宮本も又西荘

ちなみに蜀山人の詩集と雑物あり

詩集　十七冊

ふもとの蒼　九十四冊

詩集は各年代の心を収むれども尊かさるを得ず、詩と
ともに収録し一致きなる尊かさるを得ず、詩と
しての価値のみの也、蜀山研究の材料も
また尊し、一冊一言、三十幅ものの短冊のなかに
其の蒼まるを敬かさるを得さるを尚世
の全くなくなる此般の短冊のあることハ
蜀山が勤勉家なりしかを語るものとなるべし
なほ雑器の内なる任意の軸籤

橋原製

箕帚の四方に散する金属の蝶式あり、乾中軸の
最も多く天平時のものなるべし物産のものも荘
々数々の形式あり、蝶も日本のものと異ることも
あつて玩賞に時を費やすべし、尚雑器の内な
柏木探古の位牌を模したるものあり、模造の
なかに実形を得り尊けるものとて、示さるべき
又ハ六寸塔婆形なる丈一尺二寸幅三寸許のも
のもあり、黄の色を以て塔婆の名
尊き形色を施し、既に二十数年を
経過したることなれども雅
趣の中に任ずるものも多し

熱田宝物採古柏園乗宣稿士

と書し背面に明治三十一年九月二日亦とあり、高橋
婆の上層に梵字を書き流石に時子家の位牌
なりと思へり
○江川坦庵の肖像を画し一幅を贈し来る
るあり、萬沈谷窟の筆なる所なり因て其の内に
祉祢を着し居り肖像なり、後下に谷窟の跋
あり、これを因り坦庵谷窟と共に交りしことを
知る而新玉家桜任翁花を挿三人共に
を知り得たり、三人の年齢を安まるべし

安政乙卯二年　　弘化　五十五　　安政二　五十五
　　任翁　四十四　　日六　四十八
　　谷　二十八　　明治二　九十一

標原製

江川邸令孟夏饗宴一日閑話之餘皆
甘庶神而収于斯今古人物肖像中何国今
春天使迫促遽然仙去所可惜乎桜任翁君
与銘令者意氣投合不勝追慕之感　余国
為市具潮江掃徊素軒腸輪轍為書其
概畧像下以賜焉
安政乙卯蒲月念八　谷窟主

（無考）
○朝倉亀三八早大出身なる国者と迄諸あり
大刻者史小説日本風俗国説を編
見也物国説を編し、晩年
するる嘉あり多年材料を蒐集し

も編纂の手を下さずして殺す、美芳集
の材料は殺後書類の手を借りやすき
しかれども詳かにせざるしかし頃
日俗と文行堂に図書を通ず、図らずも此の
材料は此書録を出ることを知れり、之の
文覧の意なり、敢て文を示さず、余清を
一読し終る時のを惜しむ。其の材料の多く潘世
恭旧本なるも所々数千枚の
也あり、古版諸蔵の書の書工を
しも映言せしめ其の数少からず、よって
く多く集めるも世に盛し入るなり。千数
の版書を集めるなり、千数の冊の本を崩さ

標原製

ざるを得ず、最も多数と点する黄表紙の如き
別会の価の高きものなり、一枚の風俗画の
為の一冊を購ひ入れるなり、其の値を積算す
れば可なり多くの資を要したるなり、買収後
なる當日直ちに整理に着手し二日間を
一区の整理を畢りたるが此の雑巡りの
資料の内なる古版講を心るべき材料
荒千あり、余が鶴助雑纂に貼付す
べきものの少からず、最も多きは風俗志
料なり六七百枚の数なり上る其内已に
拙に関するもの一百枚あり、此を数を合して
小奉書五百枚ばかりを追を貼りつけんと

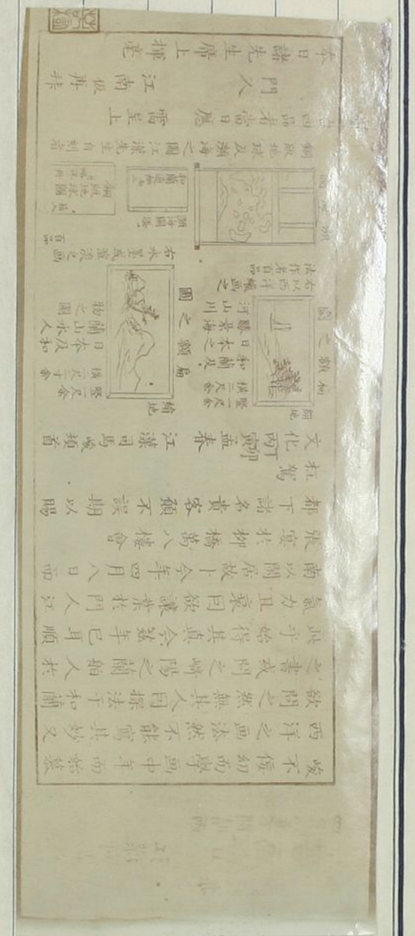
先づ大略沿革を立て、概括を試むること一日半を費し、北志料を始めとする必要あるべき年代の確定を要し、毎紙注を新たにする所、書名と画者の名の注を閲くこと十の八九なるべし。遺漏なる迫々に調べも其の注を作る必要あれども、其の目録あるべし、挑灯を年代順なるべきを得さんども、元あくまで冊子に綴り帖

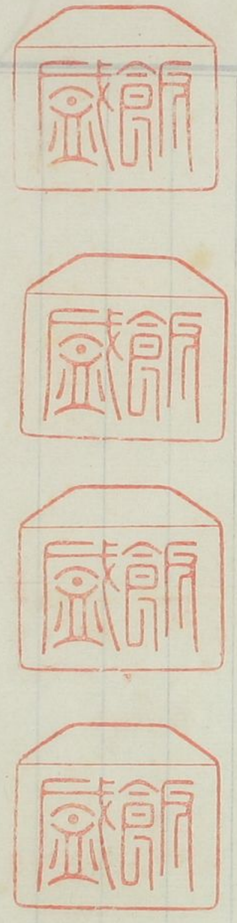
供とせんこと、なやうなり。思ふに浮世絵草紙の小説に依れるものなるも、其の挿画の風俗に関するもの、沿革の時々の実況なる風俗の変革は北斎等若干あるべしいまも誣言あるべし、勿論世の風俗を主題とせる書

なるこの少からず、雖人書山海名産図会などの類に一すも足らざれども、微細と各般の風俗を知るんとするには、画家の無心に当時の風俗を描写せしものを捉捕せざる可らず、浮世絵草紙に数多き不井の風俗に関し、風俗画の成書を求むるこの多し、七八の数の資料敢て書中なるべしを得されども風俗誌の考據として頗る貴重なるべし。無考の余と親交ある冊誠の蔵書集余の手を煩しなるべきものの因縁なきにあらず、無考の書も恐らく満足せんか

四月七日記

稲村三伯先生の像
本日午後四時小石川傳通院にて百年祭執行





三村作清
為尾鉄雄
印刷
木

○村山半牧の淡絳山水全紙一幅を贈る、巨岩峻立、岩下に江あり、四株の松あり樹下に四人を畫す、幅面煤氣多く表裏共に余等と半牧の畫数幅を乞ふ、家を改造する所沿革如何を一報を乞ふ、今回蘭を補ひ得たりと雖も表こぶ、紙後の畫賞と蘭渓芳翁出展と余等も半牧を愛す、氣品の高き他と同日の論すべからず、都門に出して相当の彩價あるべし偶々あらさる也

四月八日記

○日本特産紙を数葉にして一二小品と既無を綴ふ、表多く金方を張り入れ多く金屏紙也欽形の間と報歌を大起こしたる本式と出

未ており、金箔にて塗れる処、富士の上葉のみ也、外面紫砲弾形燈ハ内部に蒙火器あり、家庭に金唐犬の彫物あり、昔の陳者を列べ中に蒙火器の性質図あり、こんと殺べんハ砲隊の形と図ひ対寧ろ可也。小品西洋制刀之ハ外国産ろと時計の鎖に下げるブラブラ極めて小形なる双ハ極め鋭利ろ。北海道産木彫熊の玩具ハ繰つりの如く四肢動くやう出来て、木彫の魚の頭に糸をつけ其の糸四肢に連ろ、魚動けハ四肢も屈伸す、北海道の熊ハ魚を漁するといふ事に基のと思ひ出ろ。木彫ハ婦人小児を喜ぶ小像ハ顔に口耳目を刻せず、

横原制

サンゲリ芸ら刻ろ。却て趣味あり、他者の名ハ知らざれど、彫刻家の苦心伸つたの心といふ

四月八日記

○余に題画を托せ伊勢の西村徳太郎ハ特る山陽遺蹟の骨董三十八點を新に一箱を送り大小の上の箱に入れ書面ハ色々も世送しとの所、時日列挙し記。其の送り状の前半ハ自分の為めて買いとからこと云ふ再録しるハが大小十五箱が一時に舞ひ込入れのて、玄関が一杯ようの比。箱を一々あけるハけれども、内子を呼して伯一時間を費し仕る途中で上ハ某の蓋が破れて内部が暴露されるものあつたの、仮令ちとしてハと氣者つたれ、えうろ、木

朱の陶器なども多くあることとうんぬん、途中破損せぬことを氣懸りなり、取り敢ず全部を點檢するに一時間を要し、時々無きことが殆んどやつと。ト書もなく西村氏やつと。三十八點の大小の茶碗は大合李三個を這入りあれども、ほとんどあるのみ、今更ながら其の豊富なる數多いと。こんなどのものなれば、總て伊藤氏主張して茶碗を書いたやつてもらかつたらばいと考へた。保し持主もなく思ひ切つて全部をわたしに托したことのみも思つた。品物は一々宮さんに揃り又拓本まで来てあるのだから、カラ茶碗を送つてよこしても書けるが、實は實物をこそ見せてもらはんが為の事

標原製

はの奴筋である。土器で長さ二寸五分三十八點の稀覯の骨董類を玩賞することが出来た。自分は切ないから山陽に感じ実のものであつたが、山陽貴愛の骨董類と家に花したことが興つた。僅かに旭の杜が山陽に嫁つた翁と迄年西村から貰はれ、釣瓶形の花器一双を花するのみで、骨董に故味ある自分は平素感の情に堪へぬが、古稀の先輩に達した此頃、敢て拙かずとも骨董に関する多数の骨董か若家に舞込んだのは何なる仕合せであらうか。自分一人が眼福を獨擅するのは何となく切休るい拙る熟もする。保し骨董を解せず赤山陽に故

を持つて、第十貳号の人の目を驚ろかす。自分一人の眼を驚ろかす為に無拘の仕合せであるかも知れない。自分は自惚ろうと北等無拘の知己である。自分は酒

随筆に北の西村不花の墨を好まるる為、所感の一端を書いたのが北の一群の骨董品、山陽遺愛の品と云ふ方が寧ろ山陽遺作の骨董といふ方が当つてゐるのである。との一路でも山陽の詩書数字の無いものは、他の友人や家族の書や和歌なども刻してあるけれども山陽の詩書が中心となつて、山陽が自から刀を把つて刻したものが数點ある。心孤鴻の詩のある点は山陽が詩を新しく紫栗山の詩書を山陽が自から刻し

てゐることが其の例である。どの点も皆な山陽の手まかつてゐる所を見ると、自分が中年三十八路遠く山陽の遺化にあるといふのは決して誣言ではない。

侍から頂戴の行厨に附属する銀の一双の瓶の

ことき、若し好ましく思はれた時のものであつたとすれば未

歴い点も有の味もあるべきであらう。心、北一双の

酒器は山陽の詩書が刻してあるので初めて味がある。乃ち保存から言へば初めて山陽の

作と見做し得るのである。山陽が日常生活に

用ひた茶器の墓拓盃印茅茅

皆な山陽の業疲の印象を与へる。山陽

八骨董を解する人であつたから、誣言いろく

の名器を酒に茶に文具に用ゐられてあらうと想像されて
ゐた。事実名器もあつたであらう。それゐい手も觸れず珠
玉も宝物も位を占めるに止めたものもあつたであらう
が、通常用ゐられない、活きた自分も書画をかき或は
親しい友人と書かせ、それを自分の刻した人に彫らせ
たりして楽しんだことを思ふと、山陽の茶杯も一
見家があつたものやうに思へる。山陽の抱負は恐らく
人の待遇ならも見の詩書が優るとしてどんな
自家の考を刻したり、其の茶杯を玩味を副へたらの
らしい。実は今となつて思へば山陽頗る先見の明が
あつた。其の道具の重んぜられない山陽の考がある
からのまだ長く見えるが無つたとすれば、先づ名工の作

樣原製

へば、何具でもあらうが茶器であらうが後世美を
重んずる器がちいる。唯だ山陽の手澤品とのみ
考へ扱ふ方に風がある。来た茶器を美く
完全味をもつて服かるべきが大体感じを保すること
ここにあるべきである

四月八日の録

○四畳の間を得て午後魁堂にゆかう、彩る
ものの注を附する必要もあるのに三十
八枚の器をまづい方のの時を長くして
堂面の題器も秋と複雑とする面倒
のものの題器も漸やく畢り墨乗と
弁当自器を十数箱詰まつてゐる

若し或許度の方を或し野を酒を思ふも
息む、四十個ニ要ンとする大小の景色書室と
称い難けれども納むるに物あるを以て
なり、相応なる器物にて実用に備へ
るものの或を多くは山陽自刻とすべきこと
は決して疑ひなく自刻の或刻なるの
は勿論自刻と称するにかゝれらさるものもそれ
なりと思はるゝものあり、山陽の印刻と名のの
唱題もあることなれば其のまゝ離れのしに
刻もあるも容易に出来難けれども較
く拙なるものを自分は山陽自刻と注し以
竹洞少が山陽とのを雷の方形の方面板数

標原製

の時の無きに所しく山陽自刻を称する拙
此の一群の景色の内心紙が蓋に詩を彫し
刻し以る大木硯、是に山陽が硯底に銘を
りなるものなるに高き孫金すべきものなるべし
は四号仏右義なる山陽の共鳴と作る底に書
を刻し以る也、手提相者の号なるべきの山陽生
右のものを思ふるから器の四方に成石と山陽
詩墨白金心を刻し以る四も孫なるものとやき
なるも、火入を作る必ずも四郎に銅を張り、是と
山陽の竹刻なるべきを反吹と竹田の書を
刻したるものに孫中の孫とすべし。尚孫と或
するものに菓子皇也、是の末地二重なる甘

ある菓子等を落してあるが、此の重箱の蓋并に西方明の京都文人のおくられし詩書和歌等の会集あつて山陽の詩書も勿論あり、その会集に山陽初め柳田男山抱一文晁雪舟等あるも甚だ北斎の蓋に山陽の蓋詩あり、こんな等に山陽が多くの人と交りのあつた書かせられたものか、或いは多くの家の手を経て世に出かの通り代到し置めたるも陽ちと思はんず山陽の蓋に其ともいふチト変なもの多くあるなりとも本代を用ひ外体制から見ても他の蓋山陽の蓋に其と一段の殊なる第一山陽の器家の刻しあるりとあるとと山陽の蓋に其と

標原製

見るべきものあるかどうか、未来が山陽に賜つた急須と茶碗一つを外部まで焼ひ四部とクスリがあり絵もあるなる雅なるものあり、其を納めある箱が桐で作りたるものあり、丈夫なる箱なり、其の蓋に海鼠が茶器を持き山陽が木米に贈られたる山が絵を刻つて蓋に作られたるもの、山つもあるこの脆弱の器品が殺伐なる刻書の絵に入れる自分の絵に入れる●那箱を表いるけんこうなる、まあか或ふ〜と賜りし作意器式意匠の銘和やのあるものは何とまく不鈍食会を思ふ、或は和やがあるものの意匠を凡つたのかとも思ふ、山陽の筒詩か刻ま

とみるべきけんバ一厨の位さるべきものあるべし、えんが寺人の
四郎とあつたことを思ふと高時の時の人か但馬守。
山陽か備前に勝つて研究ハ種二寸許の竹を割つ
て形を出来るものと外部ハ縁代にうつしたるか案の初
かるい骨董ひ自分ハ世つてる厨やのまゝ、まん
こ備前か陶者ハ山陽割愛と書き立入かの書
をしたあるを、但ハ北条と頼のある所及ハ中世と山
陽の行者か初さんとあるを、ハ山陽も
已か改作とあり四のら備前と共たのであらう。
備の茶箱と栗山の行者を山陽か自刀と銘を打
つたあるを山陽の行者を自刀したものとも称
ひあるこんるとハ北の骨董辞中の随一で

樣原製

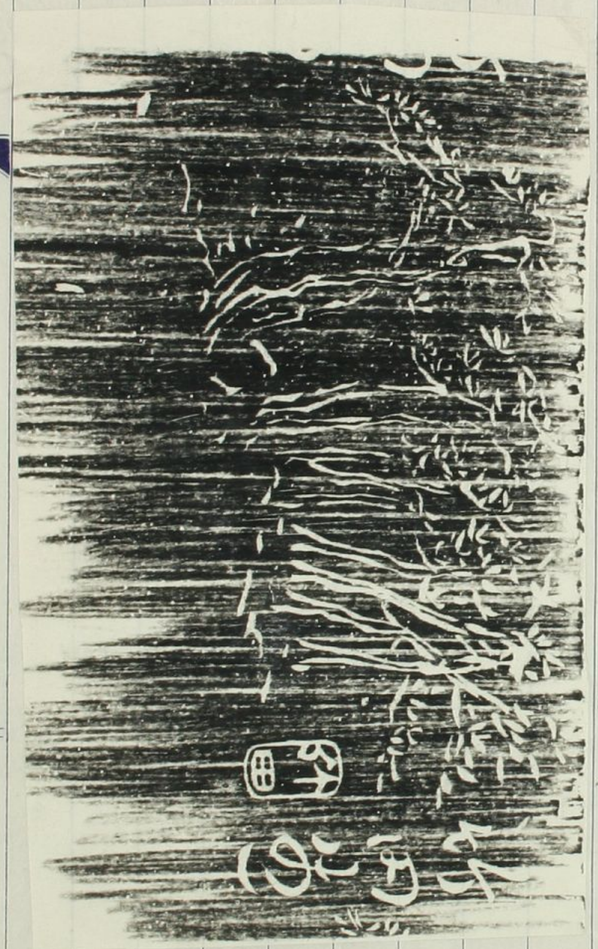
あらぬかるを四大体山陽の刻出を見るよ鳴年のよ
ハ年まで来ど多へ、釣り傷ひ市のうれ代ものと会ひ
る友人と会ひしを自ら刻ひ、のえを仕用したあ
くらうか、茶托上数茶会茶箱等備前との会ひ
明る蓋四芸ひあることを思ふも、どうも そう感せら
る、所刻る所山を焼かしたものあらうが一の方其の名
かるぬ、小井ハ方んを紅毛あつたを地の一部の骨
董の四方人微者も 鐵ひ。 まあ表 の部 ハ貴方の手
るあり梅鶴と葉蘭ハ印の和こ方、こハ寿の芸ハ
とうあつた四郎春の意 まも什と思めあるべ
四月分の復仮称す。

北寿一郎の骨董の内二三を陸付ハ芸多山陽家

[illegible]
いたるまで、みな山陽未完、後後[illegible]
を[illegible]する[illegible]あり、[illegible]
[illegible]、[illegible]を今の[illegible]西村の
先[illegible]主基の手を[illegible]
[illegible]山陽[illegible]あり、[illegible]
四五[illegible]、[illegible]
木[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
の[illegible]

[illegible]製

[illegible]と書きたり
反吹と刻したる仲四の畫巻を刻したる
木米[illegible]山陽仲四の刻画[illegible]を存す



○川俣の図書館に貧しき岸信平氏雪華の死を悼むの詩を示さる。雪華と親しかりし伏見の詩の作者に雪華と親しかりし伏見の日吉の郭徳寺の住職なりしが、露と親しい余の陶華子聊かなる、山陽が露の庵を見るの詩、其面影乃ち似たりとて立ち帰りを祝す一筒を九州に送る雪華一家の七回忌追慕やかな交情に味あるものあり、雪華殉後四年の追慕として忘れ難きの感慨を覚ゆ

四月十日記

複写製本

なる人なるべし識者に生まれかりしことを書き遺はせ先孔子の遺訓を編纂に従事せしかば図書館に赴き見る人生の若作出仕心なん好なる人なりしに拘はる山陽の素行覚書を綜合して考師の関係あるもの別紙と認めらるべし牡丹の花の如き美しき牡丹なあの菊画を描いたる芸術家師と牡丹の花の如き美しきあの山の阿露さんと申さる妾かなりしことか余の師たる嵩古香師の師たる松山洋湯なる英上人の子神の書冊に有りて英上人は芸名なりし頃日地の願専寺（摂津）にありて伝教師に隠れ勉学せし人なりて常松氏遺稿とあるは伝教師なりしなりて伝教師意芸上人とは図宗の人なる交友関係なる又山陽先生と厚知なりし合て英上人生前の和語なりしに由り考師存命中に話し方なりし紀して山陽先

市立川越図書館
電話川越五五九番

生口譜に文政三年六月十日（山陽歳四十一）　京菊師等妾　南口河岸分廻の
とあり中と京菊師は艶物を陽明堂けぬ所俗なりんが所で
ものの外稽古とあるとあるこもあり
拙家の中とこり　保岡嶺南（以越後日本外史校訂者）の子川越莊の日
本外史大意抜と見せる　家安有りて
話守侍は者と有りて　苦れんまると　之の日本外史によって
以越後の京上を　南洲祐は以越後落かに出なりて共苦
与頃の書初は中と　ろと　拙かあり　稽と考くれに　敢れ城
考と　勇気中　邸　仙家多異

何月々　　以越後

市島春城先生　　山本傳平

市立川越圖書館
電話川越五五九番

賣松居遺稿　想　江州日野伏明師欽

大含老人有愛妾名露　老人去年十月九日歿　因寄影其愛妾

曾是高僧掌中玉、　空留春後牡丹枝、

何知燕子樓頭意、　七寶花臺不去隨、

詩話三四張尚書愛妾名盼々尚書設後獨留尚書
旧第燕子樓白樂贈詩曰黄金不惜買蛾眉揀得
如花四五枝　歌舞及成心力盡一朝身去不相隨

盼々和曰自守空房欲恨眉形同春後牡丹枝
舍人不會人深意誠道泉臺不去隨
映々同日不食而卒

大含上人卒在嘉永三年十月

○四月十日すゝ侍人に教業同出遊り例のごとく二三
絵巻を得たり

長野豊山書簡　一冊

豊山の手簡四十通を蔵するも
寛永の映字にてかゝるものも真跡をとゞ
かれ、各通元来乱雑、此人未だ名人
たるゝを考へ、さんとおもひの立者とし
へ豊山の色紙多く世間に流布す
間と異なることと多く、江戸の学者と称
して集英堂りあり、豊山の
偽るに出来の様子也冊子数十枚の
ものゝ、映字に白流戎子大学疏の自ら

模原製

ものもしらるゝ巻尾に跋あり

貨幣取調書

弾一彰と共に通用金銀の價をさだめ
寛永四年辰
寛永通宝の布達に内外貨幣
間四月太田
表六枚を添附し貨幣の四相場を
細に記しあり、其表の書式金銀貨幣
御方久世治部村田理右衛門の名を列
し有り、寛永金を駿する法也記載
り、四次初鋳の経過資料として欠き難
き書也

鋳銭座書　一冊

既々の家中川近辺禮が亀井戸村錢座の
遺跡を探拾し記す、明治三十二年
の出版する俗語錢貨の攷證を閲きあれ
きもとく、進くの他の物産の研究紀を
刊行の為めとて亀井戸
のみをもとめるの博士べし

行軍備急

一枚摺り折本にして、陸軍の急
手當に可なり重宝あり、江戸末期流
四家倫が窪命も著すまで治方多
く実験を生みしなるべし出前の
備へる毒薬規の無き時代に於て当世

標原製

の法方なども効あるこのと著けるはまたなぶ
こん今に於ても行軍中必要を感するも
なり

○書面から衛戍、術戍から書面へ、此れが自分
の老後の日常生活となるべし。とうも終の書
面なるべしも、消化が充分ならず、坐りつめ
脚も苦痛を感ずる、午前中は訪問があるから、新
紙の方が午後は大抵衛戍地巡回するもの
目的がなくて、ただくとそぞろに歩くの
みである。復興は新たなる洋式道路を見るのも一
興である、初めて開通の電車に乗て見るの

無趣味とハいへども、或ハデパートのいろ〳〵の陳列を見れ
り、丸ビルに入つて物を漁つたりしまする。時ニハ力
ヒ井に立入つたりもします。係しどうも面白の目的
かなくてい散策も興がない、出る序に小品を漁つ
たり、古本屋に入つて、図書漁りをすることが弘人
と通例となつて、大抵何等かを手に入れて、書商
に持込んで、相談して買ひます。これが為めに
めに一智を生ずることハ論なしとハいへども、これが為めに
事物に対して、乃ち一智を生ずるハ一金
を失ふ所以である。係し一金を失ひて一智を
得ることハ、得失の償ひとしてハ、兎角動
かないハ事物に得る所がない。

論書商と五六氏つてみても自然
来る図書や印刷物もあるが、それがまくハ平凡で
自から動く獲物とまでハ行かない。
衛頭と書商と遠路が無ければ、面白味が薄い。
獲物図書や物を有する所で、且つ見れば
獲物者を探する所である。自分が日々探する
雑誌も衛頭に待ちかねて、蔵れたものを記録
外ちらつい。古信と入つて、兎角家に帰り
であるが、衛頭と出されば、新しいものを觸れ
かつある品が硬化するどうせ巷中に人間に
市巷を吸収することも強ちるくらへ。都つて
ものがそれを所有して、市巷の中

活機があり回転をもって得難い精神的の生きかたがあるが、交通の発達は国際的の生活をもっとせわしくさせる。動の世界は毎日毎日ますますせわしくなることを免れない。怪我をすることもまた多くなるのである。危地に投ずるからである。交通の極端は明治の頃の[illegible]うず、天下の公道だ、どこを歩いても勝手だ、[illegible]てさと電車自動車の犯罪の多くなる[illegible]元だ。おそい。公道の解釈が変ったことをいうからいかんだ。動の世界に[illegible]ある。示唆の多い[illegible]の歩道の歩まるべきことが交通道徳の教[illegible]とか、道を譲ることが[illegible]公徳の第一歩だとか、[illegible]の標語は予備に掲げる。

標原製

[illegible]年[illegible]多数の怪我人が出来る。戦争に入ってはエロテックの志念も落らいで来る。義者者をも捨ててもいい、電車や乗合自動車に乗って、他人の迷惑をかけるのもかまわない。美を鑑賞することは自由で推[illegible]の情合を[illegible]自身も共産主義である。いろ[illegible]の情合を眉目の美で[illegible]を見て、女の顔はよい、頭髪がよくきれいな男[illegible]の肉づきの発達する男きもの、あんの軀幹は低きを男[illegible]の色は清白できれいで[illegible]手を[illegible]くらを見出した、あんの顔をあんの軀幹を持ってもあんの髪や顔を[illegible]胸膚を[illegible]、[illegible]

刺きもして、死から人形でも心るかのごとく、胸中（腔）を抽いて車中無言の無聊を慰める種が、どこかに有してみる感を会の例（世業）であると云へば、エロテックな（るが、とんも亦美的観賞で、市巷を（解の後ゆ北観あるも出来面白なる。いつも的出中不満と嘆きまることは公園の奇と仏にもあることは、日比谷公園は勿論のこと、復無で生来れ得ぬ所のものを生れまるる遊人を休憩せしめる設備も成らるべからず論ずべきあるべきがどうもかつて殺風景なる椅子、人と接近と交一とう午そ然しも淡書をし、ベンチ瞬を会るやうなものが無い恐らく新しき興つれ公園とも夫婦日比谷の公園とならびあらう。実に角公

原製

園こそ遊のうれい気が起らうへ、こんと就ても思ひ起すのは北京の公園ひとある。これは古城の趣をなしたるもので、さして林泉の美があるもなく、特殊の菜亭が出来てみて、実個の腰掛椅子が一面あるのみ、そこは吐ると共に自分支那気ならが源よりうれあるのは周囲の古い気が表気集る者はすくないのであらう。日本のやうな都会の雰囲気のうまい、雅会なことは市の設備がのうとも、あんなものは無かるうんまいと思ふけれども、北の大都会なる塩梅のものが、のは不満である、北京にもまた、本来の生時代の桂林園と思ひ起す、その他上海の動物園の

和歌山地方の淵源をなす和歌山神社の息まる丈かあつたとあるが、世の変遷の変化の激しいものである。近来街衢で感ずることは乗物が階級的になつたことである。高貴の自動車は黒塗や大臣の自動車は黒塗や特色や装飾を異にするものがあるようにおもはれるが、自動車は固より格式の有る日本人の特徴の表れたものである。田舎のことく乗物をもつて中の人の階級が知れるやうなもーとの風もあつたが、今日は街衢らしく感じられるとつたが、一日を持つての自動車も五分くらいとなつたのが、一日を持つての自動車は倫侯の感がある。百貨のデパートの大建築が街

標原製

衢の延長である、とゞろ点まで用があるひとゝ之れを言ふことが屢々ある。往々のものを見て世相をもつとう相の相違を知るのも無益でないが、殊に表バしいのは、人寄せの為め設けてある陳列場を往々のものが陳列されることである。往々にして大和撫の陳列も行はれる。陸軍の軍器の陳列場を見のデパートの陳列場を見い例とが、国体や今日をもとが主役とをもつて陳列を試みることが出来ず中ごろ見ることもあるが、何人でも立ち寄ることの便利のあるのはデパートのお蔭といふてよい、世の流行などを知ることは書籍と引換へて出来

ことで、御頒数案のいかがうと持くる、此年或る藩国
の支部の麻産が殖産の為に、麻産保護奨励の
為に方々見くる、麻産の賜具の小間衣うは必
らず貰つてゐる、それを目録すると海行の程度が
あらを知れる。敢て海行とうあらずと等都を見
集まることが今もある烟と行いんかの破貧精神を
貴つてゐる家があるが、その海列中に日本船の業
行の紙幣で印義くい番号とのが不備のことが生
じゐる、それに決して慶礼で日ハそれ何等かの手章
ひで脱しとあるもあらうが好事家をいひたくこんを
物とすることが、ちのくの偽びある、稀なことをいくハ稀
んでおもいかそれを孤とするのハ要が無い事

複原製

のものの明れるから、つまるこの話を宮を来る日比、相
馬郡から目侍を宮をすると比べ、大阪あるが新
渡の為のの編しとあるで、亭国国書館が増
築紙幣の為めとあつて、住吉具慶のものし此上
明見山の風景図を複製しこのが刊来し此、
伊勢の西村徳大郎の場を愛好北稚山陽
の賛三十数歌と形書をしたのを西村の
もの表紙が変元うる来て、西村からとい
も巨硯を弱られたとい南紀の名石と文さ
一る那智里といふ石ひ化つたるもので酸る今原
の石で直径八寸元ちの幅もやゝ尺と湾ることもで
池の用材る彫り、其上の雲龍彫りてある鑑い
色

他里で石碑に事も無い墓石を見ることの石材で柵としては堅硬と共に清墨がうくるもの、色が久遠であるが、日本柵としていかるもの多くあるもの多くあるもの、そしてこんなどの大きいものを、柵としてみる。自分は雲龍松と名つけて立てる事者をしたこんが山陽の道筋に揮毫した紀念として。

○高郷里の親族から三十円の三枚の切手を贈られたので、小西を陸列する碑子張りの柵を特別に、自分の家の隣りある陸列柵の実んとする地も飾きるいるほど一柵とするとのそ、切めて示ホ品丈を別の柵と移し、ないと思つてある折柄切手の贈を受けたのでこれをあらずこれを婚ふ。ことをうつ

複原製

四月十一日記

○川俣の岸傍平来翁の内と杉本大和守の墓誌の字一あり左に収めおく、杉本大和守のもとと称し村上の墓を移し川俣と稱するもの、川俣と愛媛の称する所也、下河内氏の墓は川俣市内南町日蓮宗行傍寺内の墓地にあり岸に之れを建てしもちろん其に掃つて墓誌を宮しとりとり城主下河内氏いかの家臣の重臣を祖とする家なり、清正の子の時に四陰かん下川七流浪して村上藩主となる。爾後松平大和守に随従、特の時七隠して川俣

奉行）契沖阿闍梨が下河辺二代の子孫
村上に因縁あることなれば、なんと興味を
感じて大阪を金が来て城跡荒草に埋もれる
が機会なりとて、岸辺の資料を集めたる
まりなるべし。下河辺が村上を去りたる後のこと
などは、前人の知れることも無つれども、この墓碑の
八委曲をしあり、余の隨筆記事の補遺と
なすを得べし。かつてこゝの扶持
四月十二日

川越故大夫下川元干之墓

君諱元干姓源氏下川其先元亘肥後熊本人加藤氏清正之良
將也蓋文祿中朝鮮之役以戰功知名於諸侯及清正子忠廣有
罪而國除也　下川元知者播蕩於京師　大和公聘焉以客禮
被待遇遂委贄　為臣是為今始祖云　元知生元寛而元剛而
元豊無子君実渥美正長之中子而元豊養以為嗣子也　君為
人温而恭生十九年矣乃進為隊長項之遷為亞大夫明和辛卯
擢為大夫推輿後進薦寵下輩政旧章是率以是称忠君子藩中
士相與敬信蓋終其身無擇行君配孺人元豊之女也先君卒聘
沼田恭兼女嫁七年而卒娶深澤孝澄女皆無子令根村業辰中
子為後名元善君以享保庚戌九月十五日生於奥州白川以安
永甲午七月廿三日卒武州川越其北城在于城南行傳寺若干

地。

銘曰

不慙乎德寧愆乎職亘矣政令柔嘉維則

定性院秀感日禪居士　寛文八戊申年九月廿五日　下川元知

本住院自性日悟居士　延宝六戊午年四月廿三日　下川元寛

成恭院学仙日勇居士　仝上五戊辰年　五月十二日　下川元楊

法岸院桂輪日秋居士　仝上三丙寅年九月朔日

此外同寺の墓域の別に同族なや下川氏の墓あり（三基）

川越故参政　下川元長之墓

川越城主なる松平大和守（結城、五家門一）　明和四年より　寛政三年迄　石高　在城

越前　勝山（三万石）　十二年

仝　大野　五万石　十年

出羽　山形　十五万石　五年

播州　姫路　十五万石　三ヶ月（某書に八）

越后　村上　十五万石　十九年

播州　姫路　十五万石　十六年

豊後　肥田　七万石　五年

出羽　山形　十万石　七年

奥州　白河　十五万石　五十一年

播州　姫路　十五万石　八年

上野　前橋　十五万石　十九年

武州　川越　川越　十七万石　九十九年

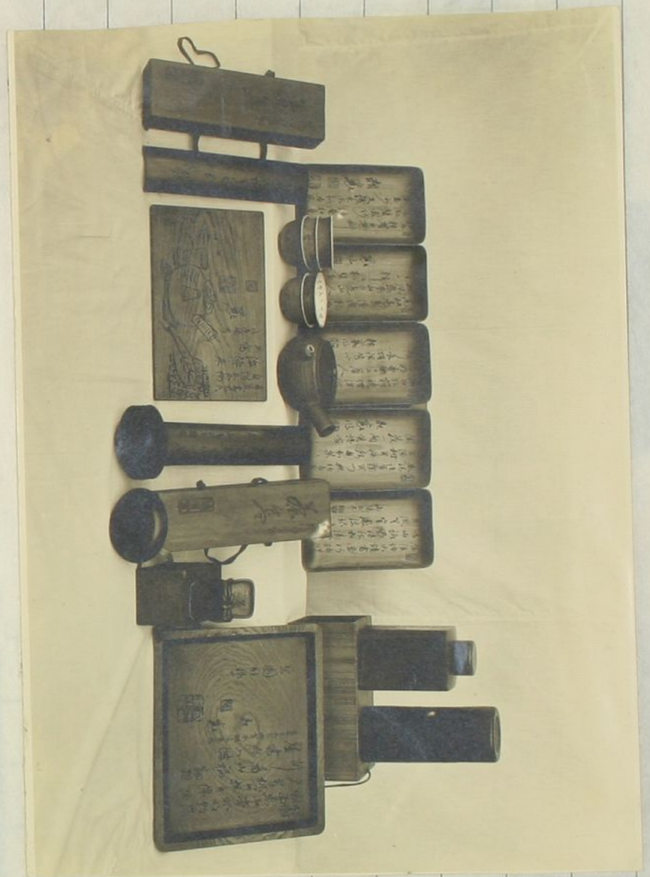
上野　前橋ハ所替

此内豊後肥田ハ名城ノ地ノ由ニテ減石ノ上左遷ハ越後見タンドキ例ノ騒動ニテ其責任上カハン左遷ニナリタリト聞ク

○西村政義の山陽の遺墨扇面一日飯塚
亜洲氏と京の親族と交付し畢り
既書の無未比是ものと俗と竹匡底と
前年西村氏より寄の七絃琴と刻字
の拓本と有り、拓本は鄭助雅筆別集の内と
収め寄せいたしたる所の紀年の栄四と偽り
花鳥を双刻せるこれハ一百年前西村刻愛
余と無ものの所、家珍の一なり、

複原製

榛原製



○余去年笠屋に堆積の反故を捨て鶏肋を感ずるものを撰び、別張に帖十数冊を作り鶏肋雑爰と名づけ一集ごとに至る、其の嵩さ三尺の高さに達す。世人とり分け公卿の彩毫集の反故を得て、其の風体筆勢と[illegible]九冊の本に収め、再録のごとく内古の版の標本とするものハ縹の一冊に作り之れを古版譜と名く、尚ほ余の笠屋を捨てるに去年張込置たるものの数百紙あり、其内双六二十数枚の物と一冊に張込置ハ三冊に張り合せ鶏肋雑爰別集と名く如斯るも数函に満ちるに反故漸やく整理と

就きては、想ふに此等の反故は雑然として乗ずれば
いとまきもなくなるべし、殊に不便なる多少
数則ち乗ずれば参考なるも浩瀚雑し、且反故といへど
もなほ趣味あることもあり、偶ま法方なども来るあり
保存するものもあれども、此事家の宝の如き集めたる
ものなれば進々余の手に帰するものなり、少かも乎
おいは今日得易からざることのものあり、五年集めたる
と合せば二千枚なるべし上るべき数、
○今日文行堂を訪ひて太田保の韓漢子習字毛筆
稿本十一冊を見る、食指動き値の不廉なるを
云とせず購ひ入る、習字毛筆は日本人の著述中支
那人に誇り得る名著の一也著者は家族と指

橋原製

して活字本を作らんとせるに二十部に過ぎずして此の
まゝ十年過ぎ年を重ね実に流の歴
史を有することなり其の価も高い余は刊行の漫筆
に称するあるにこれを繁説を要せざるべし活字本
は右の値段なれば頗る得難く且つ頗る値の高き
ことなり、余價に拘らず義人ことを祝せんとする活
字本は未だ千を入るさる也然るに今其の稿を
得たるは実に仕合と云ふべし、此の稿本の色
は極めて見るべし、装丁の細字も本文の傍らに
書込みたる細書も皆同筆にて、塗抹も少かるべ
きに著者自身と見らるべきことの見るべき、余は此
人の指南を見しことと無んば家かに美と断し難

し、随所に所々附箋の文字の原稿の文字と異なるを以つて見るに、或は門人中筆録の草稿を謄写せしめたるものかと思はる、各冊の末尾に「享和元年二月廿六日操筆」と記するを例とす、乃ち「享和元年三月十日未時畢」とあるが如きは一例也、試みに流宮本と對照するに此の稿本と多少の增損あり、これ定稿前のものなるべし、未だ委曲對校の暇なきも也、尚ほ此稿本が太田の自筆なるや否やは敢て問ふの惑なきを得ざるは、整頓せざるも注するに塗抹少からず、荒しうして人の淨写をすんで塗抹まもなくたゞに傳ふるの要せざるが如く、塗抹は草稿自身の筆とすんば草稿の自筆本を見做し得さるべからず、況南方の草稿の楷書を見さんは此點確かなるべきものなり、之を稿本と見るべきは差支あるべし、草稿刻苦の跡は歷々見るを得べし、尚流宮本と對照し更に記すべきことあらば、此書余が近年獲たる最も全本の色とす　四月三日記

○前と反故裏現のものを拳く、而して紙表未だ表きず、卿が補足する不ありん、余反故と紙味を同じくす、一通事人の顧みざるものの若くは何等かの差違あるべきこと、少数紙の挿繼の如きも、之を棄てず、各所ともに字のもとまる配り板と唱へらるべきは

概して多の趣味を宜しくする故に之を存して置き、
尚庭園其他の室内装飾等にも其の工風あるものゝ
之を存する事、其形の小なるものゝ日々録する雑記の
内へ張り込み、雑紙の冊の表紙又は装飾とする
ものゝ、雑記の冊の表紙又は扱帙にもされ
張り付けるなどが、一番生反故の活用法なれ
斯は他の名案を生じ、換出す炬なしければ、
実は一定の つれば ムる 収めつゝある者かず、保存
一年若くは二年を経て此等の反故の堆積する
を待つて張込帳に収むるを例とす。勿論新らし
き反故のみるべきものゝ少きに、考古に資し得る
反故は書物などゝも通じて得るものなし、新ら

標原製

しい反故と雖も年を経んば古反故同様考古の資
料に資し得ることを思へば、なるべく反故を散じ
する時は感する多の感興を云へば、其の往昔
の面影を彷彿として目まぐるしい中に感しが
あるものゝ、それを(中略)而して扱帙するのは可なり煩はしい
けれども、扱帙宜しきを得れば組合はせ比反
故が初めて光りを放つのみならず趣味を二倍
へる。実を云へば片々たる反故なれども、多の一
葉丈では、どんなに興味があるといふのが、数多
伝つて始めて一種の趣味を生ずる。初めて意味がまで
て生ずる。自分は常つて反故は景といふを要とし
ことがあるが、まぐれも(中略)切と記述し得るものと思

して長くあり、また一説をふるに、今ふるひ小形の
反故例へば書面などのちらし、いろいろの報條、高標
の如き片々たるあり、風景を云へば芸や旅客の輪郭
などひきこなしたるもの、あるが、まんまるも風
景の要素となることなれば、ふんを結いて風景
を為さぬ。中ゝ山岳に擬ふべきものもある。富
嶽の後項其他を画くものや名山の粉本なども
ハまん自身山であるけれども、まんをいのものゝ
崇高山に比すべきものがいろ〳〵ある例へば高僧や英
傑の肖像其業績などハ大山の擬ふべきもの
ゝ。大河長江に比すべきものゝ反故の形が横
に幾人の長さもあるものゝまんに比すべきもの

東京製

あるゝ。反堂機関に比すべきものゝ古刹の建築
図や其宮殿や其の庭園の図や古彫刻
を模写したるものゝ、擬ふまものゝ、其
他自身が反堂機関の一部をなすものゝ
ある。烟雨淡雲などハ景色を彩どるものゝ
あるが、星まつりなる拓本や煤ハあるゝ古刻を
いまんと擬ふべきものあるゝ。単俗の世相をあら
はす絵ゝ俗画や書付高家の引札富嶽の
札の類などハ市廛を擬ふものゝ、市廛も風景
の一部をなすものゝ。道中の宿駅
表寺社の事物の沈の類ハまん自身寺社を
表象し驛路をあらハすものゝあることハ言

まむかひ戦場に目を晒す浮世絵師は先木の擬めべく、多くの名勝の図や新古戦場の図などは先自身大なる風流家である。世間の趣味家は往々自家の好む所と偏しも或は金石或は骨董或は書画或は浮世絵と部分的に蒐集する人が少なくない。これも研究の資料として意味があるけれども、自分のあらゆる方面に渉つてゐる雅然の気宇やうひも、自般の趣味は宣うに地の狭めらるるとあるべく、自般に蒐集しうけんべ八景に擬することは出来ない。

四月十四日　池

張八を為すべき必要なることと一類のあるを俗あることであるが、随つて得た限り

標原制

あらうる場合をもかねぬ従来必の鍋焼を色かねぬ従来必の
九鶏肋雑記十冊の類を合つたもの
八冊就中多いのは古版と双六丈八冊が
多いから数しも外ない
を古版譜と命じ双六と収めたものを
双六集と命じ鶏肋雑記を収めたもの
き材料ひおのつから一冊に纏めてあるもの
八、そのまゝとしてある、陶器は色紙帖
と　が陶器とは古人の書画や、手島橋
庵の心茶のポスターや嘉永頃の高
標や報條を集めたもの　浅家の蒐集
を蒐めたもの七或冊があるが、元来は

鶏肋難義といひこゝろとなる、他にも同じ類ひ
ちらちらと別てあるようなものがいくらかある、閑
を待て難義中に加へて置めたいと思ふてゐる
○明治の初年は一般人が商業会社を全く理解
かなく、たゞ直接に利益を無かるべき商人たちさへ
無理解の者多く、之れを資を投ずることを嫌悪
し、政府も強制的に勧めて、廛肆の如き固
定かる者人を無理に納得させた当時のことを
思へば、真に隔世の感がある、銀行が始めて起
つた当時我輩が力を尽した事四苦八苦の
の苦労が其の頃の事柄を推さえたから勿論奉公会
の為めに少の附金をしたのも心好で四苦八苦

西洋めかしい新奇のものを命じて南社といいまとんなまちんが異様な姿をこしらえて大阪や東京の大商賈は皆ち恐怖して忌避したものである。時の政府が勅令まもといのようも寧ろ命令をしたやうな譯だから別して畏怖もしめたのも知れぬ。我邦で西洋のコムパニーを働いて創始されたのは南社が大阪始めて出来たのが初めてであるこんな貴重三年兵庫開港の為め彩る機会が賀易上又安政五年小栗上野介伝つて主唱された伝果で大阪の商賈二十名を巻かせんとしめんとしかるに答多で無つたが最も利的な文化を伝る著作和大学の人名社会生活時の悪意割を撰人びとると次のごとき伝ちが

横原製

ある

寺内の手あかい彼等が到底納得しさうもないと新文化を幕府が彼等を説ぐと東都二條城を見出し大目付杉平伝右衛門が奉行の小笠原長切日付役柴岩次郎成美大阪四奉行の小笠原長切日付役柴岩次郎成美の正成美らも彼等と南社の為用を命じて共設立を勅令したのである

此の天降的高社なれば何の理解ありて

（註）

つ此の説に於て一方で承諾しさうもない西船術用達加納治郎八

ハ迎合者と彼ず二十名を召集して高社の要を説し他方ハ幕府が賈商

從し此の社、已むを得ず承諾して商社を設立
することゝなつたが、元来商社は合資結社と
外ることゝの如き多く、其合資結社の目的
を達成することゝ、多くの出資者を募る
必要があつて、多くの商業の参加を大阪の統
一商業、布達し以て、一向の成果が無つたのみ、
十数名の商業を以て所謂呼出して、東西
町奉行所の上、数等一統に商社御用
掛を命じ、彼等に心得を辞退の旨を
数度に亦変入れんとすれども、偉かれ丈加入
することゝなつた

忘れ難き神仏まで祈つたとふが、訪る強制的の

標原製

合社の業績は不結果として無現に終
明治二年、明治政府は全国主要都市の商人高合
社及為替会社を設立することとなつたが、此時も大阪
の実例と鑑み、頗る困難ひなつた、時の政府は
大阪の富豪山中三郎兵衛、長田屋村石海中
屋の二名を態と東京に呼び、大隈伊藤
井上山口等の市長が集り合社を立ててもら
ふ様、命じた結果、二人は引受けることゝ
申出の上、大阪の富豪に呼出して命令した、
社の設立と奉行
明治の大阪の商人
あらぬ援助を與へ、東京に出て来た井上

芳人山口吉芳が来阪して加勢し、大阪の高
人い盛ってきて参加することになった
明治二年八月に漸く咱々の勢を揚げる
ことになった。
当時に於ては大阪田舎豪農が豪い奔三
奔四丈の参加を拒絶したそこで南高も生憎しい
ことでい居じるものと者て云って、東京府の官吏いと中
の上官権に訴く威嚇手段を採ることになった
役芽一同を召集の上沿の如く言ひ渡して威嚇し
此動揺の中、高飯倶れ愛不の念を起し四
を保護し各国と墓立の御趣意を知弾して
中途に於ては遂に解散に至れ

樋原製

百姓共地位を一の段に上げ、ようやく色の乱暴
な言葉が吐かれんとしたとき思えるのであるが
当時に於ては民権ものが全く敵視されて
いた時代であったかくの如き威嚇いまし
高飯のことであった
拒絶された者も心ひきとなったが北海道へ移住を
強くられることあっても役芽も已むを得ず服従する外
術はなかった。新くして幕府の弱点
四
益々威嚇手段の外に香餌を以って役芽の歓心を買
うことも少なからざりきであった。役芽は金と飽けば
節を世間の手に帰し沿仰のようになった。幕府も

徳川幕府も此の香餌を以て釣り、其が威嚇ならんも
知れざるを恐れしかるものと思はれる

幕末の高社に就て言へば、頭取として山中義武
之介、庵原左太郎、長田作兵衛の三名は、一代限
苗字帯刀を許され、且旅行の節帯刀を許さ
れ、厳格として天王寺屋五兵衛は苗字帯刀
免及び少年並に旅行の節帯刀を差許さ
れ、高社所員を中付られ、飯村平右衛門、
原久左衛門、藤原五兵衛、平瀬亀之助、
増嘉六郎、白山彦兵衛の六名は其身一代
限苗字御免され且つ旅行の節帯刀
を免許されたり。高社世話役を仰付られたるも

複原製

勿論苗字大扶持宛下され、高社所員の内
の長平長と共に一代限苗字を称することが許
されたり

以上述べたる如く高社は其の設立を発
軔に、徳頭取及び頭取共に初めから苗字帯
刀を許されたるの栄を担つたのである
素町人僅かに苗字帯刀の御免を得たのは大抵の
市長の威張方へ対するくらいなれば、嘆賞すべき輝
荷ものから、ある者なり

併し乍ら元來が素町人で、其の前垂角帶姿を平常見て居た人々は、其の俄侍を尊敬する氣持が生じなかつたため、其の平常を知る隣同志の連中は、反つて彼等富豪の俄侍となつて、威張つて居たことを嘲笑つた。それに就いて面白い話がある。大阪の北濱二丁目の角に堺屋五郎兵衛といふ紙商があつた。其の角を毎日或る俄侍の富豪が通つて、中之島にあつた通商會社へ往復して居たのを、紙商の小僧が見て、『そりや俄侍が通るぞ皆出て見よ〳〵』と囃したてて、盛に素見かしたものである。其の俄侍の富豪も餘り嘲弄されるので立腹して、其の旨を官廳へ訴へ出でたため、官廳も其の儘に捨て置く譯に行かず、早速右の堺屋五郎兵衛を呼び出して咎めた。五郎兵衛は恐入つて次の樣な誓書を出して詫びたといふことである。

以後相笑ひ不申候御受書の事

御用掛御用行の際は俄侍士など申し相笑ひ不申且又店の子供にも言ひ付け吃度今後は相笑はし申すまじく候依て此段御受仕候以上

之に類した喜劇は未だある。それは昨日迄乾物屋の主人であつた原某は、通商會社の頭取並になつて帶刀することになつて以來は、其の出勤日には袴を着、大きな刀を腰に差して堂々と出掛けて行つたさうである。所が近所の小僧連中はそれが可笑しくて堪らなかつたと見えて、原某に嘲笑を浴せかけて居た。終には或る小僧が戯れに其の帶びて居た刀を背後から忍び寄つて觸つてみた。所が原某は大に立腹して武士の魂たる刀に觸れるとは何乎ぞと叫んで、勢よく其の刀を拔いて今にも一刀兩斷にしようと構へた。勢よく刀を拔いたものの、何分にも俄侍のこととて、其の刀の使用法を少しも御存知なかつたため、振り上げた刀を如何して切り下すべきかを知らなかつた。そこで不體裁にも刀を振り翳し乍ら『無禮者奴、〳〵』と唯叫ぶ許りで、立往生し、如何してよいか其の處置に當惑したといふことである。

五

兎に角兩會社の設立に參加した富豪は、苗字帶刀を許されたために、武士階級になつた氣持になつて、金儲が其の本來の使命であることを全然打ち忘れるといふが如き有樣となつた。元來通商會社にしても爲替會社にしても、何等役所でなく、前者は國内商業の仲介をしたり、又は外國貿易に從事したりする商事會社であり、後者は金融の便を開通せしむるが

標原製

ために設けられた銀行の一種であつて、共に營利を其の目的としたことは申す迄もない、然るに彼等富豪は武士であるが故に、かゝる營利に鞅掌することは武士のなすべきことでないと考へて、會社へ出勤しても、其の實際の營業に意を用ひず、刀を差して上座に座ることを以て能事了れりとなした。之に就いて阪谷芳郎男は其の著「日本經濟論」に次の如く記述して居る。曰く『併し乍ら其時分の事を調べて見ると餘程奇なる事があつて、政府では商業の發達に力を盡しても、人民に於てはさうは行かない。一向通商會社の主意が分らなかつた。卽ち通商會社の役人に命ぜられた人は全く官吏になつた樣なもので、帶刀を許されて武士になつた樣な考を有つてゐた。東京の廻漕會社が月々計算を出し、之を通商司が調べて見ると損失があるから、取締役を呼出して會所が損をするのは御前方が損をすることになるのだといつた所が非常に驚いて自分等は役人になつた積りで居たといつた。』と。廻漕會所は爲替會社設立後間もなくして設立された會社であつて、兩會社の分身會社であつたやうなものである。之によつて當時の町人が如何に武士に憧れて居たかが想像される。そこで此の町人階級の憧憬の的を狙ひ、それを餌となして、商社なり又兩會社を設立せしむるに至つたのである。

○而宮寮然、再世の獲物韓非子翼毛筆を
翻刻し且つ活字本を取つて對照す、二本共に
天明癸卯五月の自序あり（行ちがひ自序とあり活
字本は跋あり稿本は跋を
序と書す）活字本は跋あり稿本は跋を
闕く、而して跋を書し年次は享和元年書手
江戸落邸和館とあり、日天明辛酉より享和元
年に至る此間十九年を隔つ、少なくとも著者は
十九年の長心血を滅きしことと知らる、跋文を心
りて享和元年は稿本の成りし年也、稿本の
末卷に云く享和元年二月廿五日始業、八月六日
終業百五十九日とあり、左すれば此稿本は定
稿と見るを可とす、但し活字本と組又初めの方は跋

標原製

の附言中に辛酉の冬とあるは、辛酉は享和
元年にて此は時に齟齬あり、但し活字を組
み始めて種々家庭の支障を生じ、代辰亥夏
に至りて業を得とあれば著手より五年餘を費し
文化五年に成りし也、即ち序の天明三年
より上版まで十八年を経たる也、稿本には愛られ
添刪あるのみにて、齟齬訂正と添加の文甚だ多
し之れを活字本に検するに數處訂の添加は本文
注の添刪は多くの取捨あり、中略
從ふを見る、但し此の稿本を底板字の底本
とするは如何ぞ疑なきにあらず、斯る稿本
を底本に充てんとすれば板本字を雇人に写

る相違あり、或は他の稿本に接し、底本を改むるか、
底本を改むるは二三ヶ月の後地あれば門人をして写
とせ清ちうと思はるれども、何のもあれつくづく此の
稿本を検するに著者の自筆なること疑ひの餘地
なし、他の写字生なるべし、雖き訂正頗多く、時日筆なるもの又あり、附箋若干枚は頗
る数字の書き改めなり、その格と書体を異にするごと
くなれども、既に視れば筆者は決して異なるに
非ず、辛筆を成すなる所に附箋の字を用ひしなるべし、余は節して門生
との勝写のあるべしと信じ快感を禁ずる能は
ざるなり

四月十九日記

東京製

以上録し畢つて更らに著者自から稿
本を浄写したる五十餘ヶ所の補注は一回浄写畢りたれども
なほ補ふべきものあれば浄写の際見を注の
所に入るべき筈なれども、頗る多く
毎紙五六件乃至七件を数へ、如斯き補注を
見ること或許の日子を要せしか決して半歳
の時日にて成し得べきものあらず、跋後の細書
録する所に據へば稿本の浄写畢りたる翌
八月にして翌年の冬、印刷に着手したるが
如し、されば其間殆んど三ヶ月許さるべ
きず此間に斯くも多件の補注を成し得

べきもあらず、余之れを疑あり、版の細書を検
すること

辛酉之冬得之、時木子二萬餘、木子不
良巻差凹凸、五日乃一張、徒費工力、
更嘱工人悉敷之、但刊出不足、通共
三萬餘、然乃将就刷印焉、會室人
興疾、病越翌年、病若作、又感
時疫、維暮之春、右指腫痛、百方無
効、病愈益篤、恥羸氣倦、五兒
幼少、抱持不給、季女絶乳、通夕呱
啼、懐抱珍玉、謳吟候旦、中饋空
歇、補綴有期、藏之篋底、去、井印之人、

不能操筆、蓋亦年艱疲已極、斯業
殆汨没焉、云々

右の如くあり、之れに依つて見れば、法宝を得て
三年の後、之れを稿木に
補刻の為めと内人の疾患の為めに印植字と
手を下すことを得さること幾ども及び
ばざるが如くなれども、左まれば此間を補注を心
りなくと思へども、二年の
刊行備し、二年の
稿本の整頓、注漏つ多件の補注を必ること
ハ、ようやくの業、病毒の乳兒を侵
しつゝ之れを成りなんとす、水市の勉強を

要し乞うて、境遇の悲惨真に目睹を禁
じ得さるものあるも
跋文記する所に據れば昔時弘人と島有と相ともに
時に火災あり、或は再び池魚の災
として僅かに免かる、未定稿なるも、稿
あらんことを憂う、活字に附すとあり、僅
を存する巻めて活字に附すとあり、僅
かに二十部を刷行し、[illegible]
得べし、其の調いたる稿本なるか、其前の稿なる
余が得る稿本なるか、
か果時火災の年月を詳かにせざる
心判し難し、恐らく余が得る稿本の前

複原製

の稿を作すものなるべ
早稲田図書館の稿本第二巻闕如の稿本
を以て補ひ、地書世に傳はるこの徒々欠本
あり、余の得る稿本なる跋を闕く云
て巻末に附す
尚跋の細書の内に作蘇坦の名見ゆ、
一説のまと思へしが今の同名異人なり
初見秦一三篇著者韓子の説なるべし
と断し附録とせるは著者の見識なり

○三島良寛氏の校交は杉井関係の遺産の任を
をやつてゐるものと考へられ婚姻するに大谷が妻

の関係上媒妁とする、多く劇と関係ある人が仲介者
として来た。佛蘭西の代理大使が佛和事務で祝辞
を述べる、支那公使ロシヤの大使が祝辞を述べたのを
日本語に通訳する露人が通訳として既に述べた
祝辞の四人の氏名を、どうでいらせるものと
芝居がつてみた。自分の力も二三新人と祝辞
を頼まれたのを辞して吹聴屋の思ひつきで、芝居と家庭を結合する一場の説を陳
べた。首尾は略するが大変あたの如くである。
新郎は劇の俳優と共つてゐる人だから
芸術と関係がある、こんから新郎新婦
の作られとする家庭の任務を六階の芸

横原製

術とある。而かも此の芸術は或る要素として
劇と芸を同ふするものだ。家庭芸術
の特徴をもつものべきは、男女結婚して出来
る芸術で私はこれを合化芸術といふて
ゐるが、劇と或る二元のけの俳優とが互ひに
互ひに、レテ、ワキの綜合芸術で、六張
り合化芸術である。合化芸術といふ
は、実は高尚な、いやらしいといふ意
合がぴつたり合ふものと、そんちんのことが起
つて芸術が破壊される。結局合化が
あるか、行ふを附けかくて書く人に強制の
心得はあるべきけれども、添かの書が蛇足

とうて寧ろ無い方がよいとする。劇こそも
家庭ものも世協力者の呼吸がピッタリ合
つてこそ、そこに月満ちる藝術が出来る
のである。家庭に於て夫唱婦随の美風を
欠き、或は猫や嫉妬るものの為めに風波
を起すし、夫婦の家庭を治め
ることの円満を欠き、離れく勝手の行動
を擅にするやうなことがあつては、公心養
術が立流に出来ないといふ。家
庭を形づくるに於て何ふるも夫婦の間に大
切であることは、双方の心事が互ひくに諒
解されて一點の無いことである。

原製

る。先刻媒妁も云ひたが、劇の夜間のる
業であるから、婦人に勧めるには義の毒が
とあつたが、良人の心事に疾きことさ
いのようなれば、良人の帰宅をかいくく深夜と
なつてからといふのである。婦人が義しかみる
ことはいろいろのである。之の劇は一種の操の
試錬場ともいふべきものであり、男女の優が
義者の上に相抱いとかいふことは、それは
偽托で、男優の夫人がそれを見て猿妬
を起すべきものである。新作は舞台
の人でないからこそ面白いことだが、劇は家庭
とある意味に於て通ずる所もあり、家

詩僧

嵩古香先師と長井雲坪翁

嵩古香（先師）と長井雲坪翁

朝画人傳に掲載なしてある、前今予中央公論に長井雲坪翁の傳を村松氏執筆の予告を見て、雲坪翁と古香先師との交友関係逸事等を村松氏宛に寄稿せるに、其傳中に村松氏の厚意によりて加筆せられたり　近来長井雲坪翁に関する（が）者間に認められ、其の人となりが又仙骨に富人で（文）画人とふさはしので其墨墨が珍重せられつゝあるは　祝福すべきである。

たの事項は余が今ど何事も寄稿せざるゆえ一ま（と尺牘）

荒い中より　予且て嵩古香先師旧蔵の雲坪翁と書簡を恵

標原製

庭を修ちるる教訓とすることである。要するに芝居も自作も如何に駄作もあれば駄作もあり、六傑作もあるといふことくは家庭も随分駄作があることは親くに新印新婚の。かこんから作らんとする新家庭は傑作であらんことを望む。

○川柳の岸作平氏より昨日ぶつく稿をのこしてゆく、前号に載る記事を此冊中に収めたが今又長井雲坪氏に就ての逸事を得たから其儘茲に収めておく

四月十七

悟さんで秋花なくてゐた、今は祝文林胡風君と両物倶に呈し

しまった。　雲坪翁の書幅（半切を「休死之草書たり」）

「一聲荼毒聞皆喪　遍野嚶嚶送

文兎三寸舌伸安国剣千秋

凜々白刃寒　颯々子〇口」

古香老師の詩稿、破寂寥稿（別掲廿五ページ）に記せる一詩あり。

「得信人長井雲坪之書。云近移住于善光寺側乃有此寄。（雲坪善画）

意中山水依相忘。　新畫荘陳古道場。

也識妙工三図一。　彩毫分得白毫光。」

それから、尺牘の文は遺憾ながら一、素堂覚書に書留て置かなかった為に全文を想起なせないが、雲坪が旅中火のありしこと、それから大町に宿泊して其状況が書いてあり、古香老師に詩の添削をなして頂いた礼と古香老師より書を送られた礼が述記してあり、其の終りに近来官位にある人々の書を依頼する人の多いのを（こなり）にさわったと見えて、けなしてある弾に嗚呼、一六翁の弱点（ねんて）でもてるのを笑って書たしてあるのは一寸面白く感じた、何位何等などゝ官位でこれをどかしか余程雲坪老人のつむじをまげさせたらしく、偶ばれるまねであれ、書も書老師は同じく果亭先生

とも存知で、果亭さんに私しは毎日山（秋又）ばかり見てゐるが、貴方は毎日富士ばかり見て居るのみを書いて居れとのこと依頼して　雲のみ書いて金紙が故右師の庵室につるされてゐん、（注上）

○亀山素三郎山陽の詩幅を示し来る、稿本元文の為めに書しなる摂州歌なり、刻本にある詩と出入あり（略）なり、未定稿の押韻とのこと、此定前後の詩を対比すること、なるべし、勿論此定前の詩は定後の詩に劣かてる也

兵庫の刀酒可飲酒可飲　南北名蔵　回
山勢宮殿　中央大江水流　河去不
皆指与人　河の茅　○宮城如錦　龍顔
帝倒西石　春風梦　那鄂枕伊
丹剣芙美　者酔一杯　飲底公
之五入都　東海金房　鞠飲美
以歩待　録　心実酒　者歩飲以者
牧　　蓑口口

詩集と刻しなるものの左のごとし、得是器也
左の方に国元を所しなる家皆改窮也

山陽詩鈔　巻八

甲申　文政七年　四十五歳也

戯作摂州歌

兵庫用　酒可飲　海内何州當此品　屠販豪俠
隨地異　腹貯五州水滾滾　阿吉不肯捐與人
阿藤營宅城如錦　龍顛虎倒西逝波　戰血滿地
化喜禾　伊丹劍稜美如何　各酹一杯能飲麼

此夜悄たる〳〵沈煙不出来　蹄西意を動す
〳〵さるかな

四月十七日記

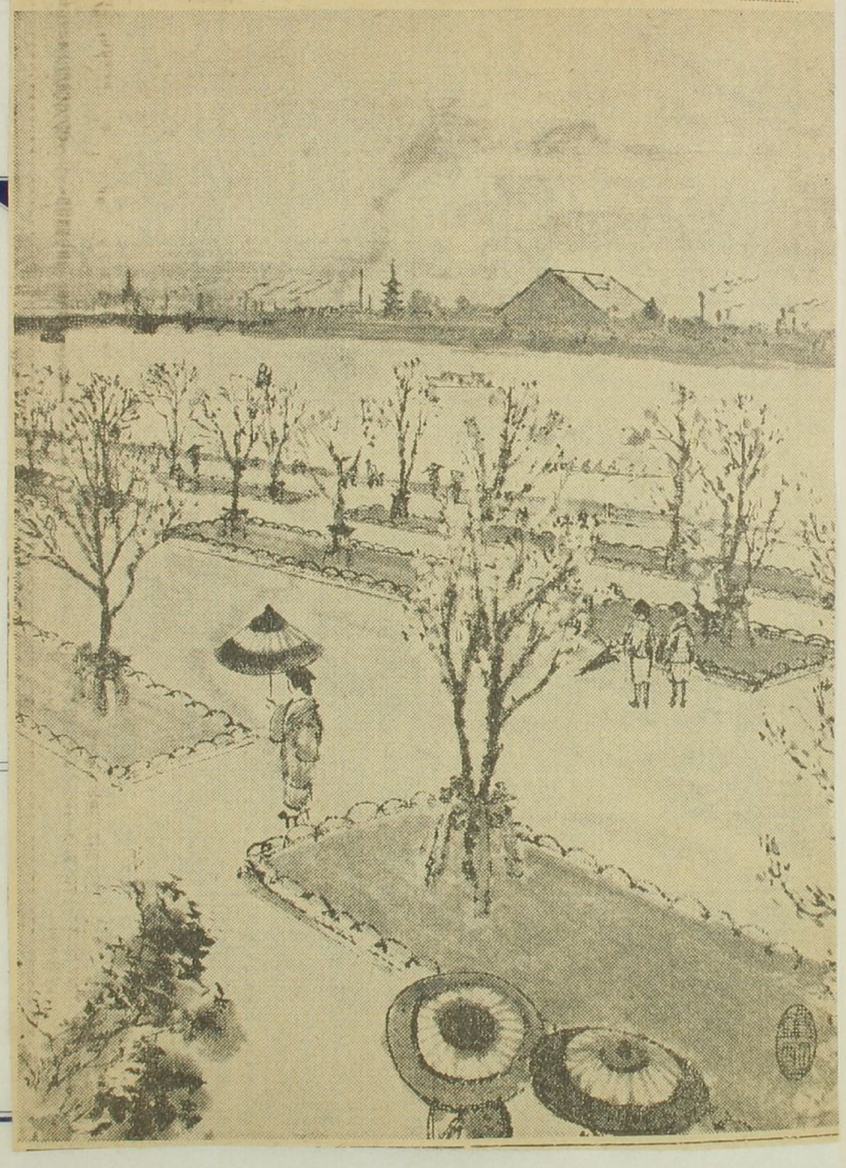
藤原製

○雪崩に乗じて陽明を攻め先に陸下御出関のすし前に行あつて高きさ、
さ所がなくて、再行して樹木の横倒の如く平家
橋所の川流船出で上陸し先づ白鞘須あ
ちりまで前田兄弟かしも方面を見ず、北方面まハ
行ふがしテ設備なく、玄関の上陸地點が治
河谷の一端であることを強しその玄関固一名
主宰でもて比が中ハタ、キの上ニテ一ぱん、橋の
子でもるナ、旅美を出す筑向とそうてゐる可
ろ多弱出でなるが、固るも考えも決して品
ハ下つ地ゐるやうな思いれたのなかく公国の歩
道の節を引いたが、陛下為出関後ひも

番田見に時と格段の変りなく、植樹も段々植
えつゝあるのつゝ。前田は土堤の幅がどんなど
積がつゝかよくも考へなくなつゝかが、旧時の幅を
にすると確に四倍位もあるべき。桜樹
(桜の植つてあるのハ二條か三條で)
(とあつ)
を越堤として言河(ら)の河の可なりの道の
であるが、彩る樹陰は大つまりである。何れ北の土
堤を築くなら需火の為め生じた燒跡の煉化
るを埋めに使はあらうとも一年計りで
んなどのものを築き揚げたのは大努力であつ
た(右市)なる。北公園の川縁を立つて前岸を
望めば、もと軒を並べてあつた人家は今は無く、川
に沿ふ一帯の地区は沿河がーデンとなす設

計で、今為きりは樹木を植つてあるが、その地
帯の幅も思つたよりも広く、向う河岸の
公園としても充分にあるから
木が繁茂した他の場所と比べて、前岸と
して確に美観を呈するであらう。
怪しげな人家の掃地を見るよりは、緑りなす
風森を見ることは風致の為めに大なる進歩
と云へる。四丁目部は元拂はんで、もとの庭園が
北のガーデンの風致の心臓となつてゐるまゝ
遊人の入るを許さるのが、歩道から(を中)
彩られた碑の建つてゐるのが目に入つた。こんど
明治天皇が御新後特に彩を部と親しみ

隅田公園の春雨　結城素明作



うもうえに時間下婦の御来を刻しかしあり
戸の田邸址を紀念することのひある。まだ香隆
もベンチも据付かず、休憩すべき茶店抜
のあも一切ないから、人出も稀である。大成
まるひるまぐ可きの日数を要するひあらう
（四月十八日記）

○我輩が「朝寝いつるべとうえもらひあ」の句を吐
上人の待ち疲れとな

井を移往事半花狂夢攀柳撫又斜
級綆無端被渠奪、朝来乞水向都家

○菱湖の落所をとこ三餘一樂とる隠棲
す山井鼎の家系と関する逸話あり

標原製

山井鼎（字君彝）は徂徠先生の門人なり。其藏書家なり。
君を知るもの、人々往昔杉平左京大夫殿
の祖先なり。仕へて中興なり。祀廟なり。今を
去ること百数十年、延享年西條侯二世の初世
に公寢ませり。然るに盛姿正しき士礼服を着
し進んで公を拜す。公、鄉の何人なるやと問へば
答へて、役士巻を以て往昔先公に仕へし
山井鼎なりと。夢覺めて後、公、其夢の
思を考へ、近臣に問ひ、公を如何なる
人なりしかを知らんとす。近臣一人老人に志
かくのごとを語る。老人いふ、其人の夢なるべし
曰かく、山井鼎の往昔長藩に仕へしことの

樣京製

遠かに偲くべきのみ。其人君彝家藏を主
婦んかとの夢なりしとぞいふ。近臣
老人の言を公に告げ、公、即吏に命じ古記を
探索しむるに、果して鼎の仕へしことあり。
つまびらかに其夢の思ひなりしかを知る。
かの男伺助を主とし山井氏を冒したる
湖南の後なり

○安房の国の書、廣瀬氏の著述なり。其の小巻帳
の表紙に流水の二字を書したるものあり。
用紙表の裏に、何の海なりしかを出でず。再び
問らさることを願ふ。

○五雜組に作庭の訣を云へる吾意を以て

假山須用山石、大小高下、隨宜布置、不可分整、
蓋石去其皮、便枯槁、不復潤澤生苔藓也、
太湖錦川最不可無、但可粧點、一二耳、
若紙是難得奇品、終受粉飾、大勝無復
丘壑天然之致矣、余每見人園池、踏名山
之勝、必壑蔽以亭榭、粧砌以文石、繚繞
以曲房、堆疊以矣峯、甚至假聯題額
累累相望、徒滋勝地之不幸、點山靈之
嗤嘖耳、北浙江南之賈、竪矣江北之園宜
也

又五雜組ニ

槐花黄、草子花、把批黄、醬者花

日本にも柚子黄ありしかども、似寄りたることなり、赤蘿蔔、紅なる蕪なり、
ハ、唐人少しとも云へり。

○三餘一樂に左の一話を收む

悪き酒のまずまずきらるる深川の一膳飯
また酒客の好かぬ女房おらぬ酒屋を主とす
向うせもしかの八百屋敷なるを一人
のみ飯のみ其揚げ物の下に三絃の
撥を取つて壁にかけおきぬ、さて女房の食ひ
らずせもんともしれぬ伴の揚陰中を刺り、ワハト
いふを即死せり、三八の事なり、主情を遂ゝ公廳
に訴へ出、甚だ厳しくなりぬ

○昔文行君で大概如電、逝近して一時百ぱい能候
と交へた。其後自分は東京の湖心亭で説文會の
陳列のあつた時の事を思ひ出し、あの時中井敬
所の孫花と少きころ学んだ様人々を得無
かつた、富士を一説した、それは小菊紙で狩谷棭斎
の自寫した日本の金石文である。その中に三枚山
陽が手傳つて寫した所があつた。自分はそれを見
た後大概文彦の出品の図書を見ると、矢張り
小菊の紙に棭斎手寫のものがあつた。その出口を
見ると、書名が半截されてあるので、さていと心惜き
敬所のものと分かつたを見ると、ビッタリ書名の完璧
を得たのだ。それを[illegible]する立つた数所に生げて

標原製

文彦に報ずるとしたが、文彦はそれを
如電に報じた。百人の共に敬する人は逝去の
間柄にありながら、一部の本がよく離れて
家を異にすることを今さらのように感ずるのである。共感
敬所は考きるに如電と違ふものがあるように思ふ。自分は
自分の職業を之れを書
から其の事の決する事は自分が預ることを
笑つたことがある。その如電と今日から考へると
のことも之れも、あの本は[illegible]とうとう[illegible]と少くとも
敬所が却て逝却する[illegible]の[illegible]件を紛失
逝つたように、[illegible]件は敬所が死した時の完璧
の稿本を大概く戻すということであつた。然る

家族不幸後遺族が約を食んで戻さるるの
報不幸の聞新聞といふ風の男が、やけぼ何
も蚊も戻却したといふことが、あの信玄もどこへ
入て行つたか分らぬといふの巷を騒がす　四月十九
○犬に言の特のうのある事実を無きことがある
が、作人戻の五月西敦朴著すの跑者三角
一無に左の記うあり
杉本戻生色まし時寵愛の犬ちう戻
不図仮初のやうに病死ひしが次第に重ら
せ絶ひけんば、戻年臣亀を呼ひ枕辺に医療を
尽し且諸社祈願祈禱をちるしまうるかを彼犬いつしか往

標原製

生のでる事もを手をつき歯ぎしりを数ちて
悔も既ちも真似をちるる似ていと悔かる
ちへけんば人皆らん似詳しく思ひ知るる
其後又近辺有る西年一月戻の病手
命の祈願うて漢書一ちもを既をあひ神
仏を祈念しあるる高を又件の犬来もに
人と共に深るを冷ひちる時を戻の病者
かりり良薬効を奏ちる天保丁酉の
年一朝の霜と消く絶く西さん尋注の
数の上ちあも更ちる和ちる彼犬戻の神祈也
あるちもも越ちる味ます事を魅傷の体
ある人しが終自ら餌を絶て死ちる人皆

こんを見て犬までも斯く恩を知る人さ者らぬ
行為かうと奇異の思をなすと石巻の山
中源吾物語の如し。
然後ち主の為主牧兄家の義犬のうい常て食が絶
業こ知りし浅野侯の浪人平家の犬い主侯の死人に時迄
戻る如き忠犬が四国まで馳せつけて、海を泳ついとい
つか頼寿伯から中人に聞くことがある。昔時の犬い皆多
和種で洋種の無い混じてゐる。犬の絶滅い
洋種の猟犬でゐへことがない。
○自分い十一年飼つた愛犬が死んだから、念を飼犬の絶
つとが偶然生れた仔の犬を貰つてくれた人があるので、亦
飼ふことゐつた。今の犬い ポインター種で色が

樣原製

赤で、足が長く、ふさけることが非常に皆く持て餌する位
であるので、之れを南世界のモボの名を命じた。雄で茶
に届けた時に、輝つた名だと云ふ。犬が笑つた。犬い
前のと全く性格が異つてゐる。前のい優柔温良で
如何なる鷹揚であつたかこれい極めて敏捷で細を解
く譯に行かぬ。前の犬い自から戸を開けることをせず
人に開けさせた。他人が何らかをやつても決して吠えず
うと。食物の側にゐても、寧ろ主人を護つてゐて
世つてなければ食いまうと。ところのい家畜の用
捨も無い。前の犬主人が帰宅すると必ず迎へ
たがいてゐるのに迎へることもあり、未知の人を
も冷然たる時もある。前のは子犬であつた

時はあざけて、主人の寝床まで這入り込んだから、今のもあざけ笑りかも知れんが、うつかりしてゐると見ひつくのるから困る。前のは室内へ入れて置いたらいつも公子時分から主人の膳の前へ咲してゐて、お膳を頂戴した。寝中のは妻が寝床へ入れてやつた。そのは決して家へ上げぬことにしてゐる。前の方法をしたが今の方法をやつた。狂犬きちがひ豫防である。前のは公私が数珠つなぎであつたが今のは何んでも公私である。前の方法であつて今の家来であるかのごとく品位が異つてゐる。飼犬も実は五年以上成人して今の麻疹で罹つて三十日間病院へ入れたことがある。去かし大人は自分の公害を異く

原製

てゐた。一家の寂寞を破るまでこんが無くてはならぬ。前のは家族が自慢した毛色も風貌も行儀もよかつた。おのつから威容があつたが、大限美を似てゐると云はれ、侯爵家の別邸の犬人形を賜つたこともあつた。毎日出入する犬人屋とは大の仲よしで、死人は後も時々此の犬屋は墓参に出かける位、犬は人を愛するものを〻知つてゐるらしく、塀の穴(塀の穴)を這ひくぐつて、いつも尾を掉つて迎へる。塀の犬は角くとこの頭を撫してやるのが例であつた。あれは到頭肉腫の病で数死んだ。狗子仏性あるとも云ふが、動物の内の自分の犬が好きだ。

野球と迷信

戸田啓助

―野球と迷信―

◇

野球試合では双方の實力に格段の差がない限り、九回の試合中必ず一度は勝敗の分岐點に立たなければなりません。危機と呼び好機と呼ぶ心理的刹那がそれであつて、之に對する處置の適不適が直接チームの優劣を決定することになります。

野球のセオリーも畢竟この大切な時機に處する最善の方法を示すものであつて、監督や選手の人知れぬ苦心は、詰りどうしたならば危機を未然に防ぐことが出來るか、どうすれば好機を巧に掴むことが出來るかにあります。しかしこれはほんの一瞬時の出來事で、好機や危機の生ずる原因は極く微妙複雜なものでありますから徒らに選手のファンブレーやセーフットにばかり心を奪はれてゐる觀衆には勝敗の眞の原因が知られずに終る場合が少くありません。

勝敗を直接決定するに至つた投手の過失とか、安打とか、さうした形の上の原因も一層突き詰めて行くと其處に必ず何かしら深い心理的原因が見出されます。例へば苦手とか臆病心、確心、直感力、迷信とか云ふやうなものがそれであつて、この心理的作用を無視しては野球のセオリーも殆ど意味をなさないのであります。

◇

諸君は老獪な投手が新參の打者に對すると型の樣に先づ第一球を打者の頭上めがけて投げつけるのを見受けられるでせう。そして打者が充分おぢけついた所を見すまして樂に三振せしめるのであります。又反對に新參の投手がプレートに立つと老巧な打者は宛ら首斬役人が罪人を前にした時のやうにバットを二三本束にして振廻しながら虚勢を示すことを忘れません。そして投手を不安に陷れた上、思ふ存分强打を振ふのであります。斯うした微妙な心理上の駆引は、不用意な見物人には何でもないことのやうに見逃されてゐる

○白河樂翁公、旭峯といふ號がある、白河は旭山といふがあるので、それからの名つけたものである（お話）

ない。

○自分は野球を全く門外漢であるが、野球心理や技術の淡と深くことろは味を有つ、何人の投手でも勝負事は勝敗の作用で決することろ、角觝などは直來は全く頭の働きを勝敗が決する、野球も同じことである。最近刊の石油時報に右の記事があるよく投球の秘をつう人が書いてあるから、愛と牧めて世海に供する

が、其の結果は極めて大きく、時としてこれが爲めに取返しのつかない破綻を招くやうなこともあります。

一度危機に陷つたチーム選手は恰度薄氷の上でスケーチングでもしてゐる時のやうな心細さを感じて一瞬間たりとも心身の緊張をゆるめることが出來ません。一個の球に全精力を集中してゲームを進めて行くのであります。かやうな不安と懸念に充ちた場合に、假令選手にさうした不安や懸念に打ちかつだけの膽力と技倆に對する確信があつても一種の精神的壓迫を感じない譯にゆきません。普通に『堅くなる』と言はれる臆病心がそれであります。

◇

臆病は野球選手の大禁物であつて、どんなに優秀な技倆や頭腦を持つてゐても、物に動じ易い精神的缺陷を持つ者は到底大選手たる器でなく、實戰にはあまり多く信賴することが出來ません。寧ろ危機の際などには多少技倆は劣つて居つても膽力の据つた選手の方が遙に役立つものであります。

從つて野球選手の主要な駈引は何うすれば最も容易に敵の自信を搔き亂すことが出來るかにあつて、優秀なる選手がとんでもない過失を繰返したり、或は日によつて選手に出來不出來のあるのは斯うした心理的な詭計に陷いれられた結果である場合が多いのであります。

以上のやうに確心や臆病の心理は選手の技倆の上に直接の影響を及ぼすものでありますが、勝敗と最も密接な關係のあります ものは選手の直覺力であります。勝敗を分岐する危機、好機も、それが既に見舞つた後に知つたものでは間に合はない。未だ形となつて現はれない前に豫知してこそ始めて試合を有効に導くことが出來るのであります。名監督はこの力で敵の作戰を看破し、或は味方の危機を豫知して破綻を未然に防ぎます。名投手名捕手はこの讀心力で打者の思考を看破してその裏を搔きます。又打者がどんなサインを走者に送つたか、スクィズプレーが何時行はれるか、彼等は殆ど間違ひなしに直感するのであります。普通に『山をかける』といはれてゐるのが、この直覺豫想を意味したもので、凡そ優秀な選手で山をかけないものは稀であります。

◇

野球家が斯樣に神祕を體驗したり直感力に勝れてゐる理由は、丁度千里眼が與へられた一個の箱を透視して不思議にその中に隱されたものを當てることのあるやうに、選手は試合中常に一個の球に全精力を集中するからでありませう。

嘗て『野球家は魔術家だ』といつた人がありますが、野球選手の資格としてこの自己集中に勝れてゐなければならないと同時に藝術家大詩人のそれのやうに敏感でなければなりません。そして又小兒のやうに無邪氣で大膽でなければなりません。ここから野球選手の迷信が生れて來ます。

即ち選手が試合に臨む際に常に晴々とした氣分と、必ず敵に勝つといふ確信を得たいと望むところから、今日の野球選手を世界一の迷信家にしてしまつたのです。

天ぷらを食べると油が乘つてよいといつたり、試合毎に頭をくりくり坊主に剃つたり、試合前にカツレツを喰べて勝つと喜んだり、試合當日お葬式の行列に出逢ふと縁起が好いと嬉しがつたり、こんな例をあげると限りがありません。而もさうした詰らない御幣を選手が本氣になつて擔いでゐるところを見ると、この迷信が試合上に何らかの結果を生みつつあることは明かであります。そしてこの迷信が不思議に幸運を齎したと云ふ偶然な一致が度重なるにつれて、後にはそれを本當に信ずるやうになるのであります。

以上は大體選手に好運を與へる方の迷信でありますが、これと反對に選手の最も忌み嫌ふヂングスなるものがあります。これは矢張り迷信から來たもので、野球選手のやうに些細なことを氣にしたがる者に不吉な觀念を與へるあるものを指していふのであります。即ち選手の晴々とした氣分や確心を亂して、不安と焦燥の氣分に陷れる不吉を云ふのであつて、選手はこのヂングスの爲めに常に神經を惱まされてをります。

◇

試合當日靴紐の切れるのを嫌つたり、バットを十字形に組合はせることを恐れたり、或は一本のマッチで三人が煙草を吸ひつけることを不吉としたり、藪睨みに出會ふことを嫌つたりするのは、傍から見れば極めて無意味なことのや

―野球と迷信―

うに思はれますが、而もこのヂングスに見舞はれると勝てる試合に負けたり、選手が負傷したりするやうな事實が屢々起るのであります。

曾て舊明大主將内田君は成城中學時代に對慶普戰に遙々讃岐の琴平詣でまでやつて必勝を期し、一球毎に南無金比羅大明神を唱へながら敵の打者に對したが、その結果は驚くなかれ四球十八といふ空前の珍記錄を作つて慘々に敗れて當時物笑ひの種となつたことがあります。

◇

それで野球選手は何れもこのヂングス拂ひに苦心をします。合宿所に可愛い家畜や小鳥を飼つたり、駄馬の蹄鐵を拾つて來て神棚に供へたり、或はチームに福の神を置いたりするのもこの惡魔除けに外ならないのであります。

今日野球があらゆる競技中で最も複雜微妙であるとされてゐるのも、畢竟かうした技術以外の技術が試合中に戯れて樣々な駈引や波瀾を惹起するからであります。同時に野球の戰術も以上のやうな迷信その他の不思議なサイコロジーの働きを俟つて眞に活用が出るのであつて、これを無視しては如何に戰術に通じて居てもその効果は薄弱なものと言はねばなりません。

露西亞の新油田

有望視されて居るウスベクスタン地方の油田中ショルスユ油田が三月三十日突如噴油を始め、日々三百七十噸に達する多量の石油を噴出して居るので、ウスベクスタン地方の油層の石油埋藏量が頗る豐富で有望なることを證明するものとして、ロシア側では大いに騒んでゐる。（三月三十日モスコー發電）

海拉爾附近の新油田

ハルビン駐在米國副領事リリー・ストローム氏はスタンダード石油會社支配人オットト氏と共に、三月初めよりハイラル方面旅行トのところ、四月一日ハルビンに歸來した。此の旅行の目的はハイラルを去る五十露里の地點ホルンアルシヤン（コロンバイル地方）に一大油田を發見したため、その湧出量及運搬狀況等を詳細調査するためで、近く米國政府に報告一大投資をなす計畫を樹てて居る。（四月一日ハルビン發電）

句佛上人眞蹟頒布

本會は世上句佛上人の墨蹟と稱するもの、其の大部分の僞筆なるを慨し、親しく上人に揮毫を乞ひて其の眞蹟を頒布せんが爲に成れるものなり。

今回石油時報讀者に限り左の割引價格を以て上人の眞蹟を提供す。詳細は直接本會に照會せられたし。

絹本畫賛（尺幅）　金拾五圓
同（尺二）　金拾八圓
額面及竪物書　金拾貳圓
南無六字妙號　金拾五圓

東京市麻布區霞町一、若山方
句佛上人墨蹟頒布會
電話　青山七一一二八番
振替　東京七六九六六番

○白河樂翁公と旭峯といふ雅號がある、白河は旭山

事業を獨逸のハンブルヒのやうな自由都市とした
自治体にしらしめ様ハうまあ。と考さりま運動を試
又、沼間守一と称らひ、福澤諭吉氏と一説き通
つたとあるがこんちとハ初耳である。矢野の父ハ先
儀といふを維新の際の一二ヶ所のちうとちうと人が
ある。龍谷中か江戸の出て漢学の師の基人と
人ハ四日江村であることも初めてもつた。龍谷ハ英
語と学んで明治七年大阪の分校が出来た時を
の校長となり、徳島と知校が出来たのでそ校も
をもつた。福田義士の分英生で東京と(ま)学
も出来そうとのを矢野が義勇で田舞之の中
呼び寄せて自人の之
い状布から月刊と公表

標原製

を分つて学問をさせた。そんで新聞を発行して論理を
張るやうな大家となつた。今く龍谷のお蔭である。原敬も報知社と知れた
ことあつたとアくる。本稿に
の表紙に出世を志した
ハず、原も別頁)社しと
矢野の憲政運動に終始努力したが益とあるのハ
も政府を攻撃をもたず今日に迄
有の奉仕して式部官ひあつた時く事四政分が開
ケ矢野の陸奥宗光に従ひ
人の胸中ハ歓迎と光ちとの
いちんもと憲政こあこかん
不幸政分の開分をとる

矢田の言内容が起りて公使となりしが、実は伊藤が朝鮮に行くと聞きしが、伊藤が朝鮮に行くとも力の入れ強かりしが、寧ろ支那公使にと云はれしを支那の公使となりしが、これが友達なりしつゝ、矢田は大隈侯の推薦を受けしことゝ長い間ひいきである。矢田は思想が内閣であるから、大隈侯の経を補つたる和田を通じて、侯に勝大であるが、後を内閣を欲いも物を云ふ、十四年の失脚のことき、実は公の上奏が共困であるかの如くとなり、北海道拓殖を非とせしことが深く達流の怨恨を買つた、左きさいた侯は大義を握つて乗ちを拒否するの実権をみしてみたこゝろ者を以つたことも

決してかくるのつたに。実は危機の御巡幸の際に元公爵しにみたのであるの侯は勝義と任せた気の毒を留めようとしたが、あの失脚いろくのうるが藝会して原因をなすもみると又る方が安当であらう。侯は陸軍にこれを奏するとは云ふ方がいかけを受けたのである。奏論の筆者は矢田と言の文を見ても公爵と云ふ奏の体でいろいろとしてある。伊藤井上は大体の於て同意を表したことは第一先生。唯に上奏文をも平生の上で同意を得たのはいろ。先を口実として後を反対してみる。こんな侯の流儀としてみーく思案の内閣を欲いたと云へ云くぬもろいの矢田の

ものの和い略右の如くなるが、長崎の日蘭貿易である。
係し給ふ思召内閣（内閣）の内閣に於ける知れる
ことを考へ給ふものの為の陰の奏の勅命は少なく
とも北海道（北海道）掃かが兄今は大正法蘭布の例
が定められ此奏は大臣をしてなしたのである。伊藤
の奏の放膳なると異つて勅を思召内閣が内閣
つとを云ふるが内閣の内閣官となる時伊
藤は特に陛下に上奏して勅裁を得たとある。
この伊藤の細心を見る一端である。條約改正
び奏が反復し此時伊藤が元勲つと共に内閣
と矢張が奏を侍したのである。大人の伊藤と今の
ハアナタの考とを示したとあるが、あの大人が
ら

複原製

うしたらと思ふ。果してハルピンを指して其者が
来た。十四年の夫侯の奏議を高の大綱と
挙げ英国のことを内閣（内閣）の大臣と
進退すべきことが奏議の
上と任ずる三大臣（大臣大臣左右大臣）は全く政重の
流を関係なく其上と任じて地方官数を及び
司法官の任免を行ふ綱領し政事の外に一切
しとしたのの政事の要を深く考へて考案と
も）ある。自分は今日ひあの個條が実行されて
ならば今日の如き政策はなくなられと云ふてゐる。龍
渓は本日者に生仕時代に清陵頭として御陵番と
修めたことがあるが、北の侍の家の出身で新潟の高父

僅か琴を弾くまるの方法が、ある、風船の、龍頭の様に似てゐる。

○連日新片の反故類を拾出して貼り込帳に貼ることを授業し、隙を潰してゐるが、多く、数を合つことも出来ない。僅か、四寸の古版標本と、双六と、各種のポスターの丈があるの数が多いのと数を合はせて張り込んだ。ポスターを貼りこみつゝ、つくづく感ずるのは、昔しから日本に於けるポスターもまづい多種であることと、ポスターと云へば花や大道に虎美的に大きなどうを貼り出すのん限あると考へる人もあるが、ひとんかうんを使い

標原製

うびんうへ、雑誌の表紙に印刷するもポスターと見做すべきものあることは勿論である。昔しポスターといふ言葉のつかは、吉宝同じいうが、ほんとに高底とあつたこの地。尤もこれをみるのに引札とある。品数を歴記するは勿論効能が紫説さんを報條といのを昔しは戦争者などが執筆したる菓子屋などの菓子の名を書いた。ペーパが始まり、別に商館の名や印をも捺したペーパを貼るこんもポスターである。ある時代の如き家は当時各商店の此程のペーパを集めて一冊に撰者「七十五日」といふ書名で出版したものもある。大概品物の

包紙や代表る報條が印刷されてゐるのが例とするものである。これもポスターである。昔の茶双紙などには精巧な彩色絵の袋が附けられたが、これもポスターである。高麗の程数が千差萬別であるからポスターの意匠や工風も亦多端である。昔し新年には配り物を意匠を凝らした。多くは其年の干支に因んだ絵などで、これも一種のポスターである。一年の義を考へて得意先へ国扇を配つたり扇子を贈りもする。それにはさまざまの絵が書かれて必ず商店の名がある。これも勿論ポスターである。昔しの旅行には街道の宿屋を印刷した小さな

標原製

張面を客に贈つて旅中の慰とする供した。これも各宿屋のポスターである。神社仏閣には必ず案内記があつた。丁度今の絵はがきのごとく、図及史や寶物などを印刷したものがあつて其を旅客に渡つたこれもポスターである。

遊廓などでも案内記がある。夕霧に因縁があるから夕霧の名を摸倣した夕霧を賜はる茶屋から夕霧に縁因があるとて良き紙に図の一枚ひいた面白い図のある扇子を茶屋から出すが皆の花柳のポスターである。芝居や相撲の番附は勿論ポスターである。芝居や相撲の番附は興行前から出

すが、文人の著附ることは書物屋から出し、書畫の書
附は書畫屋から出す、諸ポスターは書畫屋の報條が出たり出た。こんもポスター
である。市井の男女が八十八ヶ所巡拜をなし、各地を回り、佛像と札を持つけるのは、巡
拜の証とするのでもあるが、そんな事は高家の
名が高遠の中枢となるものであるから、こんもポスタ
ーと見做さるべきものである。手跡坊屋もまた
の流れを汲む心学講中のものが車仮と入り
やすい産品の銘ともなるべき教訓を千社巡
りの札のごとくに印刷して配布する
ことが行はれ、そんな利益を目的とするものも

東京製

多いが、矢張り社会の宣伝でこんも又ポスター
の範囲に入るものと思ふ、著者と記した
も斯くの如き端である。昔しから北斗のことを蒐集
する一派のあるが、多く輯めて見れば
時代の趣が見えて巻毛とならうとも
○吹日韓小子翼毛純の稿本を得て若石
太田方の侍を訪ねて委しいことがてら
ならうと、目准に初め得たことは左の如くである。

太田金吾名は方高は、亀八郎と称す後
福山藩の人天明八年、文学に命ぜられ文化
年中側用人勝手掛年寄格となる文政

六年心月廿七日致仕、太田錦城と交を結ぶ、
一、師承数年共に詳かならず、著す所樸
非子翼毛詩十一冊の外漢語音図二巻呂
氏春秋折誤、墨子考、名実論才見漢
語音図は文化十二年出版、歌錢書中の最
良者と称せられ翼毛詩と共に学界に重用
せらる。
○近日豊山の元文書問答一通を映写して
これを得たるに、備前の儒人で元祐の性格
の人びとなることを紙面に溢つて見る。そこで其人を
あてはめて閲歴を調べて見ようと思つて国書総
依頼（比所、自来）の閲歴を調べて未だ出来ない。

複原製

と知ることが出来た。あの人は元今の世にあつたが
果して猫仗の為めに志を得無つた、此人昌平黌と学
び後神戸本多侯に仕へ、侯の命を受る外政務に無
かる、数々政治に就て侯に陳する所あり、元侯流
言流説人乱妨、七年まで退くと、遂に猫仗
そして衝突起らんとを得さる也豊山天保三
年七月廿八日伊勢の川辺に生る父は名右衛
名を祐清母は平田氏也豊山天保八年八月
廿二日弱江戸に本復す初め中に菜
著す武業、杉陰快談、三名士伝、玄説彰好
詩約、嘉彰好文約等あり、林鶴渠は此人の
つ下なり、

余嘗つて墨山自業の需に応じ將士を招ぎ
木杯の記一卷を花せしことあり頃日得たる
影宮書簡中北杯を獲たるの書ありて述
べ山陰の孫たる一冊を得たりと雖し
山来の文を低らさんも北記を以て成と称
すべき理の未だ尽くさざるあり其意いやたる
しあり今本宗の上杉家と多く交ありと雖
も未得たる影宮の書簡の時元吉氏より来信
人たるを詳かにせざるも未元吉氏
の書簡多く前橋と医を業とする家なる
出なりとなく多人の元吉の家なるべん其姓氏

複原製

を詳にを得ば後日更に探索せんと欲し明白を
なすべし

余七歳始受句讀於鄉先生南海宇翁寛政癸丑十月先君子捐館舍時余年
十一歳孤弱無所依歸家有書籍稍々繙閲之乃能作五七言之詩十九遊浪華
謁竹山中井先生受詩書左國史漢東萊博議等之書無幾先生歿文化紀元甲
子秋八月遊京師有遜齋邱本先生者與諸生同讀新唐書余亦與焉時余好讀
稗史小説稍知其無益因求周秦漢魏之古書而日誦讀之於是發憤學古文乙
丑春三月負笈遊東都寓于昌平之學舍見柴野栗山尾藤約山古賀精里諸先
生受中庸周易於尾博士之門始通讀十七史益博讀經史子集務須其學經義尊

信程朱文章宗韓蘇詩則李杜之外好杜牧之白樂天蘇子瞻陸務觀在東都
前後十年文化癸酉釋褐神藩神户本多侯爲儒學掌教侯爲猗蘭藤公之
後多藏書籍於是請徧閲之乃得讀説郛武備志等數大部之書同丁丑賜階
步卒隊長命參政議因辭不允時侯方刻剔舊弊專務教化然施設緩急
未得其宜余屢上書告諫外人弗察其本末謂我勸侯行新法且有大臣頗不悦公
之所爲者因拜忌我於是飛語流言譁傳四方市有虎曾參殺人靡所不至
仕路險巇讒人交亂妬娼相排阿黨相媚榮辱在反掌之頃自古而然不足怪也
余素多病不任劇職文政己卯九月告病辭祿侯挽留再三而余請益勉乃得聽
允余在藩前後七年其上書而言議者侯之手答具在焉可覆視也既去藩又遊
京師教授生徒今歲庚辰余年三十八讀書殆萬卷而毫無所得矣身亦益善
病牢騷坎軻有擠而陷穽者無引而救之者前後三遭中山之狼乃歎曰古人晦跡

標原製

山林詢有以矣夫於是閉門讀書益與世疎闊惟文詩宿好之敦時有著作然亦不
以示人以自娛耳我邦慶長偃武以來文儒輩出名噪一世者蓋不少矣其著撰之盛
古未有也然讀書率生吞活剝故其製作叙次無法氣脈不貫終未能與西土抗衡
也余常以爲憾於是上自周秦兩漢下及唐宋大家之文詳讀審思殆知其篇章
之間規矩嚴然無一字一句不秤量銖黍而出之也余平生所作之文殆五百餘篇
皆未知文法而作之者今已舉付之炎火而存其可觀者數十篇名曰豐山初集
十一鈔平日所好之書周易論語孟子莊子史記戰國策韓退之蘇子瞻之文
然不喜模擬剽竊焉特學其規矩法度而已余雖多病猶未爲老自今而後
幸未盈溝埠仰讀俯思稍有著撰或有可觀焉嗚呼南海竹山柴尾古諸先
生皆已逝矣縱余有所得從誰取正然猶有一二知我者或他日與我同臭
味者庶幾其有取之矣夫身之窮達聽之天而已非所以爲榮辱也此姑錄其從

前出處履歷之略且以備他日之遺忘以爲鑑戒焉亦非所以示人也 文政庚辰夏六月長野確自述

○今次の交通機関統一組織に電氣局も服を振へて無協の念を絶ち強硬に対抗しんとする。運輸事業に経験あるものを以て臨時運輸事務所を設け吉野国務長官と市電車とを市内電車八動いてみる。国内自動車業組合に於て自動車業者に許可を与へ電タクシ臨時乗合自動車ことを許可し電車●を補助しんとする。臨時の運輸手段から中止の後羽織袴の人すきがけのもある。帽子の者もハットを被いてみる。臨時乗合自動車と云

榛原製

れるが、紙に乗合と大書した車の前面に貼つてある、定期大地者市時の交業と称ひ紀とし市内を供しつゝあるものもある、交引きの為めるまるデパートの自動車も補助をやつてみるから、市中はうるく賑かで市民は見れば交通に不便のうへかのことく思はるが、夜分は休業ひあるから、小時注意すると市街へ出ることくひ生業の無い市生と載へて交通の不便ひあることゝ立てまれもあるが。志かし組織業者の對し安の角の お市と交通機関業の動いてみるのは市内のみあるが、今次の市議交通組織業の法鍊ひある、市内鉄道セ

ずやれるだけやつて見るがよい。素人までが運動
の心得あるべきやう鼓吹するのも時にあらず
年國ちんどの公共に役立つのも先づ斯時にあ
る。運轉手が不熟練の爲め衝突を生じ怪
我人を出したりしてもそるは已むを得ない
細故と看なさゞるを得ない。京市罷工が始まつても
四年を經過する、進々関西無事で東京が繼ふ
も神戸の如きも罷業を行つた。無事なるは
四新業團に肩を入れてゐる。偖し市ひは罷業
の幹部を用捨なく解雇し、他の從業者を雇
しては、若し業務に就かざれば同じく解雇す
ると声明したるのか、それにおびへて復職のもの

廿九[illegible]云へ
れて[illegible]ぬ
無[illegible]若
こ湯[illegible]患く
誰の[illegible]にも
未[illegible]手
飽[illegible]業
を奏[illegible]こと
か元[illegible]當
り共に紀の國が其立方[illegible]土の從業者の振舞を傍
觀しても多少の興味を覚える。

四月廿三日

○龍涯の條中殊くし京都に流連しし頃の

御挨拶

此度當局電車、自動車の運轉手、車掌等罷業の爲め市民各位に非常なる御迷惑を掛くるに至りましたことは洵に恐縮に堪へぬ次第であります。之は從業員の賞與一割減（一人平均年收入額千三百圓餘に對し年約二十圓を減ずることとなる）反對の要求が拒否せられたことに主因するものであります。而して當局の財政狀態を見ますと、總資本額二億千餘萬圓の內約四分の一は何等收益の伴はない震災後の復舊、區劃整理に伴ふ軌道の移設費等に充てられ、其の利拂の增加と乘車人員の激減とに依り昭和元年度以來年々缺損を續け、昨年度の如きは缺損額約二百萬圓に達したのでありまして、當局が從業員の要求を拒否したのも右等の實情に鑑み洵に已むを得ざるに出でたものであります。

當局では一昨日罷業勃發と同時に局員を總動員致し、各位の御不便を除く爲最善の方法を講じて居る次第でありますが、之に就いては各方面より格別の御援助御高配に預り局員一同感激措く能はない所であります。

目下のところ電車は平常の約七割の臺數を運轉し、自動車は約百臺の增車を行つて、電車運轉臺數の減少に伴ふ混雜の緩和に努めて居るのであります。

然して從業員の中には當局の態度を是認する者も多數あるのでありますから、日ならずして罷業も終熄することゝ信じます。

右の事情幸に御諒察下さいまして當分の御不便は御寬容の上御援助御鞭撻を賜はる樣御願ひ致す次第であります。

昭和五年四月二十二日

東京市電氣局長　筧　正太郎

各位

ず、やるだけやつて居るからよい。素人まで田運動の心得あるべきやう段吹するの所時ひまき年間ちどの分苦こ役立つのも矢張り斯時の事

我[illegible]
細[illegible]
四[illegible]
も[illegible]
四紙
の外
一[illegible]
ると[illegible]

[illegible]

十ヶ所ばかりの一角に成る山間の地を云へれたのである。彼岸桜の咲くの羅漢寺の降伏のふく毎年の北の不動尊の堂のセセ幸い世の中一光景を湯をのみる時は、常無を会う夢の羅漢誰かが四国を言のすると(交通)羅漢を四未保り五さいうやうすると、今次を接合飽まで徴ると光景がある。また四国と羅漢を代わる工風を凝らして見ることが有る大切である。自分の芸術争論の衝に当り其の経験があるから、北の岡着の推移を傍観した自の興味を考へる。

四月廿三日

○龍谷の帰中 京都に海運に比頃の

艶体の詩が三首掲げてある。

吟朋浮花二十春、半生不覓深紅叢、歌笑
樹間歌如夢、還是風流倖人
多樹點燈夜色閑、佳人羅帳共徘徊、低
秀如語因何事、有約西邨乞夕来
晩来乗醉駕軒車、淡月時訪鄰家
浮世不須説流水、十年看盡野東花

龍洲も北斎の心ある敢て不思議のきらい。龍洲
は京都へ入る未だ何の大喜と有するが例であ
る。往年大隈侯爵夫婦を随伴して京都の
大丸、下村家へ招かれて酒席へ美い龍洲の
送まりを送られた。

中村楼へ泊つてみると、やつて来た星野の大喜
一泊でも勧めるのだ、有つたことがある。望月楼
喫所で楼主を仕くろうと、空外に二階建の楼が
ありて、夏だから戸が開け放しとなつて、蚊帳が釣
つてあつた。そこを見ると中から
出たのが矢代さんである。そこから同様に一人の美人
の出たのをみて、千鶴さんきと笑ひた。傍らに
居た、夫人の云ふ通り、矢代さんはよくしらな
バクとしたことをする人だ、大喜の娘と子まで産
しても、自分の子といふ事が生長
したるとて、のろけを云ふのを、憎らしかつたと云
ふ、一回笑ひ出した。あつた。夫美其後龍

深の他の逸事を修された。寄って東本願寺法主
の拡張部に招かれたことがあった。其時夫人も
同じく招かれ、盛んな饗応を受けた。餐側の引き
物として大きな鯛が出た。こんな目鯛といえば
鯛の貴族の著を著けることもあるが、夫人はやはりそれと同じ式の作法
であった。あんな貴族的の男が、こん式の作法
をなしうるのは奇妙なことである。
を考ひ出す。龍谷荘重の人は加藤木陸漢が
ハ良い。身分が華族を載せて新汽の新宅の聘と云
し此時出来た。龍谷を訪ふた時に落城和歌の
であらう執筆中であった。いろいろの話が出た中に

あるこれのお話しから御注意ことがある。御起
任まで甲冑をお考えなさるとと真面目と云
いますのは、初めの解しかねたがそれがルーテ、サンタ
のうちと氣が附いた。実に龍谷の月
高閣の人で、我々は甲冑を用ひるのは
此の注意をきんとしたまも思ひます。夢つて其者
出身の人から女へとこと分かある。あの人の用意
周到と言ふたら尋常でない。
人とする時にあらかじめ為永春水の梅暦を
観漫した筆者に意指する趣向や文章を
ひきて研究した。夫れ日ら聊てそうして筆
者を呼んで、と言つたが、こんがあの人の性格の一

端を覗ひしもあるやらんと思ふ

四月廿二日

の今時(いまどき)不思議探偵や妖怪談などいふ小説を物するも大團圓はどうしても合理的で無ければならぬ。その材料とするものはいくらもあらうが、或る害蟲のごときは確な材料であるが、まだ誰も之を小説に書いてみないやうである。いつぞや台湾在住の人から同地の白蟻が家屋の材木を侵蝕することの恐るべき話を聞いて一寸材料だと思つたことがある。台湾のは白蟻が木を噛む音さへ聞こへるといふてゐる。外部から見ては表面に細孔すら見出し得ないのに内部は全然洞になつて、宛から紙細工のごときものが柱であつたり、棟木であつたりしたら、いつ何時崩壊し

ないものでもない。甚しき侵蝕を受けても、之と氣が附かずにゐれば、風で倒れるまでもなく、柱に凭り懸つた丈でも柱が折れ、之が支へてゐたのが一時に崩壊せぬとも云へぬ危険がある。妖怪談などには、よく深夜人定まると其の怪しげなる音がどこともなくするので燭を秉つて探しても何も見あたらない、毎夜〻静かになると此音が眠を覚して氣味が悪るくて堪らないなどは極り文句であるが、白蟻の為すところ正さに其の如くである。さて斯る氣味の悪さと柱に觸れて其柱が突然挫け出すことがあつたら、どんなに人の畏怖心をそゝるであらうか。更に何であるかの、[illegible]

新潟県下に天井が陸地に落ちる橋梁が起つたらどんなる人を驚殺するであらうか、所謂向嶋の侵蝕は実に驚くべきことである。今一つの言葉船体をかたむけられる実例は、例へば（例）ふなくひむしと云ふそれである。船頭と同じく水上生活の名物、木造船の吟味入つて、板を降の巣のごとく穿ひあります。係し外部からの衝撃と非常の難破するのは、うつかりすると不意に破壊するやうなまれに起る危険の甚しいあひ、日本の上の危害は、ひとり自然のみならず一般恐ろしい、船体はもとより橋梁や防波の杭をもつて穿ひ通あるから、外面に出るとの橋が突如陸ち上り船体が抱き鯨んずる忽然山岡のごとくなることい容易

らぬ事ひとのみならず、事実ある場合ことでうんを船中の不意思慮あ絶や妖怪の状態もあるべき減を生ずの一つのみでは、那辺に依つてい、事人をおどかすを通りる、例へば舟を陸上に上げて河中の杭に船を繋がんとすんば杭に急ち打ん込んで繋ぐこと能はず、船の艦側が偉大の圧力の為めにメリメリと山岡崩れ船中の人数の難に遇ひ、流いて漸く、橋とこれつかんとすることも其の刹那に死に落ちこむことときい極端であるが、船体が崩壊する巣くふ不安とい限らるいことんなことは妖怪浜次上の人を戦慄せしめる而かも理を外れ無秩序のことひいろ。心得のある者譯が日分つても否らせるこのように驚異である。

諸々事ごとに、石橋を叩くと云ふのは用心の深いことをいふのだ、心得ありとあらば木橋を叩き舟の艪や底や家の柱を叩いて診察するに無ければ以上二点の難を免れることが出来ない

（四月廿三日）

○昨夜文明協会の講演会（今度元職員）沢田中川氏左の米国の事業を続き而して或は北人は事業会社化し藤原氏の話しを聞くと米国は世界祝賀に比べである。北人の話しを聞くと米国は世界大戦前五十億弗の債務国であつたのが戦後之を償却して丈上れば三百五十億弗の債権国となり、世界無比の大成金である。どうしてこんな異常の富を作り得たかと云へば今く国産の成功と

依るのである。米国は戦後の不景気、除々に其際消費組合の緊縮政策を執るべしとの論もあつたが、それが為めに多くの失業者を生ずるといふの形、その方面から交易が起り、積極政策を採ることとなつたと云ふ、消極の代りに積極政策を生ずるとは、米国ならの如く思ひ切ることは出来ない筈である。積極策として先づ大量物産を作ることと、大量物産を産出する為の単純化を断行した。物品の単純化（物産）が容易であつて便利がある。例へば牛乳のビンなど何十種と異つた型形があつ

なのを去い往ゝ一等、自動車のタイヤの或十の程
数のあることゝ七程すし此ことが多くの物を
単純化したと一例である。釣く単純化さんと故果
として繁忙がれやすくなって必ずしも熟練
の親立を要しこういうことゝ、日用必須のものが
どしく出来てくる大量生産の前提として
単純化は物大切であるがさて其の生産品
のはけ口が無ければ物貨のグラウトを生ずる。亜
米利加の一億弐千弟の国民の内ひとり数
を占むるこの労働者である。此の多数国民
が国産の消費者ひ無ければならないのである
が、労働者が多く富ひあるとい買方という湾

ぬ、そこで労働者は賃銀を貯くることゝ
なった。亜米利加の労働賃銀は英国の時
さと二倍以上猶ほ比すると四倍以上ひある。米
国は既に物質的富を所有して
居る。故に物質的富は所有してみるから、労働者の生
活は物質的富は無い、そこで月賦拂年賦拂
が起った。今ひは労働者は自動車を買ひ
ピアノを買ひまたは家を買ひ
用って拂って十ヶ月又は拂ひ終いる位の能力ある労
働者であるのと、婦人が生産的に彼
等労働者の妻も長ぶの自動車ひ、彼等又云
いたると、自動車をもって郊外の実業の広い高

る住宅のことが出来るから、健康の為めに仕合せと云ふてゐる。彼等は既に自動車まで買ひ入れる位だから、風呂の設備をしてゐる。さまざまの必需品を家に備へるまでのことの勿論であつて、更に年賦で家屋まで買ひ入れることが行はれ、之れを供給する大会社がありて、最近の調べでは家屋を五百萬人に売りたと云ふことである。亜米利加の労働者は高い賃のことを世界に冠たる仕合せである。いつぞや誰れか、うち労働者に流した労働者の貯金も莫大のものであると云ふことである。四中川小四郎氏は最近の労働者と就て最等は仕合せの境遇であるから不平はあるまいと云へばそれで済むが、日傭取は

標原製

ちがあつても待遇の取れる方が多いので困ると云ふ。北上社会の働く人方は保険制度もなく、ふみたといふ。大量生産の国は皆やつて出来ないことといふのか、はけ口がないと思ふて行詰まる。亜米利加のやうな国内に広大と無限のはけ口を有し、また精巧な頭を附して買ひもの、ひから、大量生産も出来且つ国民の高低彼等が向上するのである。先づ亜米利加に感心するのは、ないと信ずると直に実行する敏速さある。日本もどんどんいくらでもいと信ずるものを行さんとへ。メートル、システムでさへまだ為国してゐるやうな仕末だ。

四月廿五日記

○西京の春花に集壽亭(集壽亭)まのびをを詩の

薫桂こく桂老而愈辣

という詩を吉いて寄せた、北人の技い老て愈々精妙の

域に入つてゐる。西北孤竹翁も吉を詩ハんて

身憂天下原死分、老愛浴生亦有

涯

とかいて寄せた。

○山村耕花が訪ねて来たので、南蘋人の蘭絵のある

家花の真蹟や羽陽の洋畫やかの有名な

畫帖などを示した。自時話し遂に共に二人の馬

鞍を愛ぜした。話次に本二天の畫に就て話々

の話が出た。山村の話ひは二天は兎に角人や鳥獸の

樣京製

骨に肉時にまでを達くから死バーして既に時す

るのが常であつたと云のみならず畫を換ずに

描くこともあつたやうだと話つた。二天は剣術の

達人であるから、既に時は剣法を擬つたらしい。

二天は天性器用で、絵は誰に教へつたでもなく

が、あんなものを書く、筆勢にお手坊な

であつたと云はれてゐる。同廣瀬国の武蔵が

出陣の時に原の女郎屋で飲んで出かけたと

あるが、そこの(原)の男であつたと見へる。山村

の話に様に共の自画像の面は強武

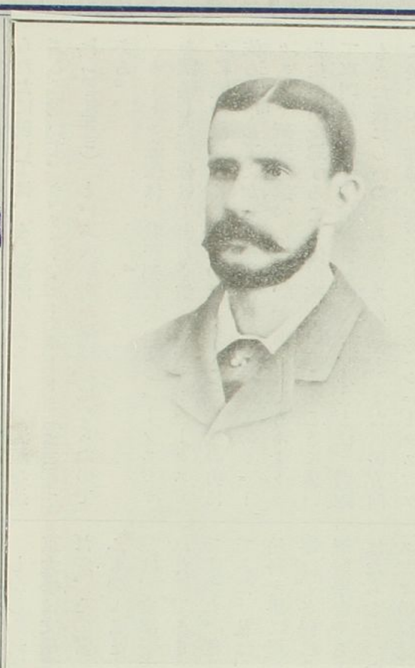
張つた恐ろしい顔だと云ふた。　四月廿二日

二天の好んで鶴や鶯の如き鳥を描く筆

段軒の間に力あり、彼れが武藝のわざは
しりが、竜馬ほどに強き口調を出さるる事
なり。

熊本なる中村とて家あり、二天の傳を
授けたる名あり。余も熊本に赴きし
時ある人余に勧めて中村不見の幡を見
せしめんとせしが、生憎主人石垣の為めに
ことを得ざりしは遺憾せり

○久方振りでホートン先生にお目にかゝる。先生は日本に来
て英國文学を教へられし初の人である。セークスピヤの
集を初めて教へられし人である。英国大学時代に



わが國にて始めてシェークスピヤを講じたる米人ホートン氏の肖像

Yours truly
J. M. Houghton
June 21 1898

代れる英人から教を受けた。英人の四籍はいづれもま
英人であるかと思つてゐた。好る品格の高い紳士
の人であつた。実に無来利加人が全く英人型の紳
士である。エール出身で、四度福沢氏が米国に渡れ

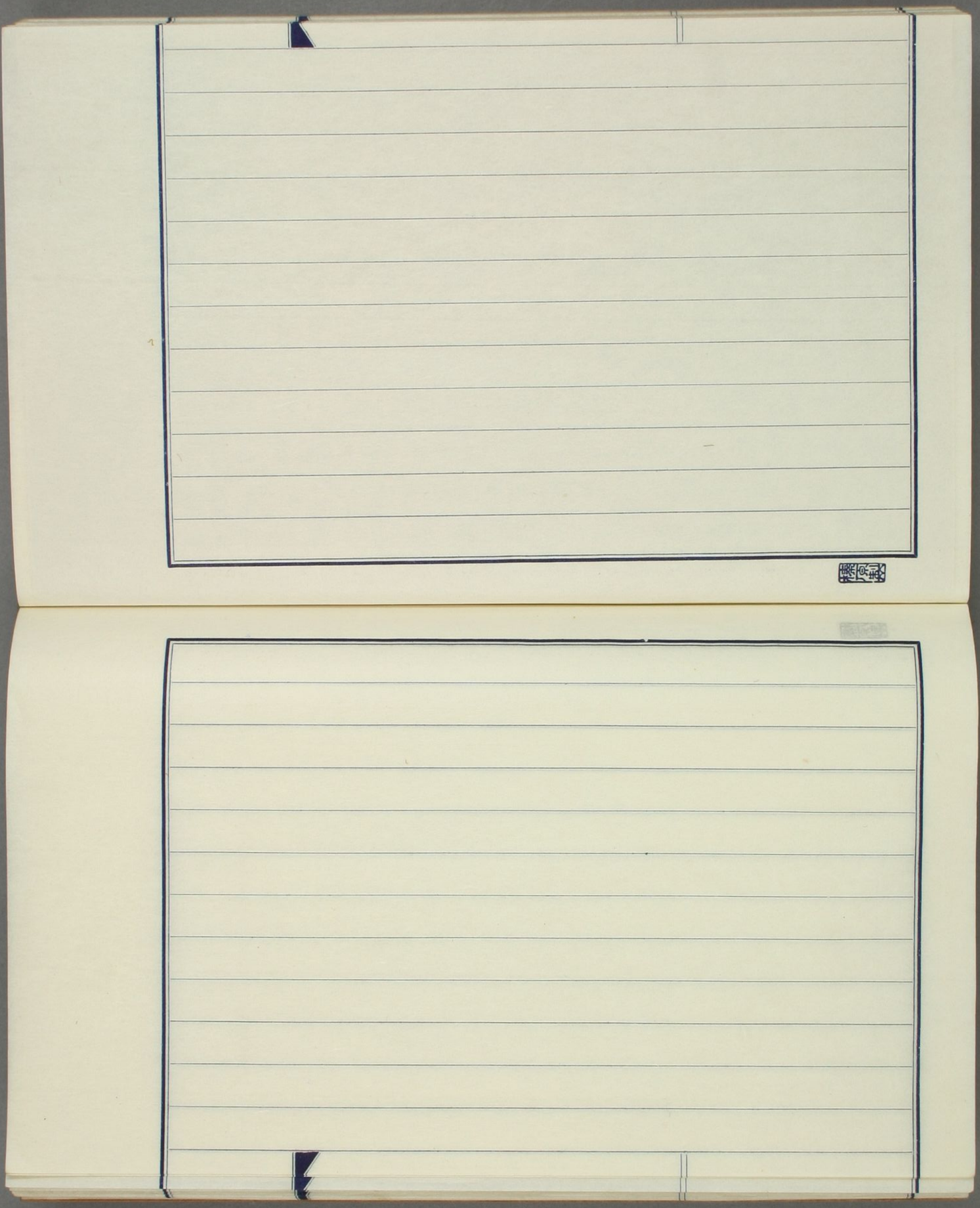
次の先生エールで羅甸語を教くことになつたことである。
此人の教授振りと云ふから極めて真面目な真摯の
体態度で、学生笑つたことが無く、流暢な懸河
の辯を揮ふことは出来ず、時々相当な音調で
説く人であつた。服装が華美であつたので、何人も
金満家であらうと察したが果してそうであつた。
此人は母と妻とを伴ふて日本に来た。自分等は一
間も此先生の住居を見舞つた。先
生が温厚で義侠心に富んでいるのを楽にして、
学生は時々先生を困しめたこともあつた。英文の
講義を教へつゝある時、フエアリー、クエンの詩の中
に、徒然の富夜文書閑居に入つてからの句がテ

キストに書かれてあつたので、それを図書館で完本で
調べて見ると、秘蔵の露伴書を見る。手帯用
級生は白川くんで、先生は此の蘭文の所はどん
な句があるかと、質問すると、先生は微笑して湛
へず、例の荘重の態に氣の毒の音調で
と云ひながら、Your may
帝大では共済寮に演習とのこと、理科の学徒
は校舎で施行をやつたこと。法科のみは模演の
領事裁判の傍聴を出かけたこともある。手帯
がセーリスピヤを教へつゝある頃、模演に外人がセ
ーリスピヤの脚本を演じたことがあることを聞き法科
の学徒が裁判を傍聴する例に倣ひ、実地研究

剛を見込いから、この校から出張させて欲しいと、先生
を申出で、先生から校長と交渉して貰ふことを
頼んだ。先生は尤も申出てこれを諾し、時
の校長加藤弘之氏に談すると、あの木強漢と
から、其の交渉を一蹴して先生に新
し氣の毒な感を抱いたこともあつた。當時は英文
学の味を充分解する者は少く殆ど印稿ばかり
だが、志の厚い先生は種子を蒔いた最初の人であつた
ことは爭はれない。喜くの上級生徒は和田垣謙三
氏は漢文ばかりや玉を抜擢したし、高田早苗
は校内の中堂文学の金ある郷本を採りて先生
の受講をやつた。ほ内宣名のレーザーを譯

標原製

する場先生のお蔭で、高等師範を出て先生
の心血を注ぎ全集四十冊を金譯をしてもらへる
つた其の本はホートン先生のあらと云ふも誣
言だらう。先生の日本を去つたのは明治十五年
で、其の前年の辛巳に先生は初めて教授
徳氏として祝辭を陳べた、自分は先生を少
なくとも先は「さすが Shem Ho Young
Japan といふ題で、エロキエン
ビエンであつたと平沢平一郎は語つた。



標原製

校正往来

創刊第一冊要目

題簽……坪内逍遙博士揮毫
挿圖……馬琴八犬傳校合刷
同……芥川龍之介校訂本
文字と用語……坪内逍遙
犬芥派……藤井紫影
焉馬魯魚……佐藤春夫
律義者の律義損……和田萬吉
猥本の誤植……永井萬助
雜談二題……正宗白鳥
現代支那出版物の校正……田中慶太郎
此のところ黒木……竹内桂舟
校正の標準符號……中山蕗峰
佛蘭西の英語と日本の羅馬字……ローズ・イニス
校正雜……藤井乙男

懸賞課題。誤植文學。校正苦心談。
誤用文字。昭和名文。辭書穴搜し。
研究課題。其他々々。

右見本の通り學界藝苑諸家の厚援を辱
して月々刊行する海内無類の小冊子に
有之候。文字、活字、校正を中心とせる
研究並に御笑草の興を致し候へば、
斯道に御關係の方々は素より、汎く
皆々様の御召に合ふこと請合の品に
御座候。何卒御別方御贔屓を以て續々
御申込の程伏て奉冀候。頓首。

會費一箇年金壹圓貳拾錢也。創刊
倍大號は五部以上壹冊拾錢の割
合にて取次方は東都一流大書林
に取次申候。

昭和庚午四月日
東京市本郷區千駄木町二八番地
日本校正協會
書物往來社
神代種亮（かうじろたねすけ）
石州津和野産

附記。老生は前年東京朝日新聞より
校正の神様と綽號を頂戴致候。
追白、近々「書物往來」を復興致申候。
併て御吹聽申上置候。値段は一冊參拾
錢、一年參圓六拾錢にて候。

係（下）

渡邊修二郎

ハ順によつてローマ字で讀音を附し、次に英語を記す。後者の頁數多きと前者に三倍す。

其緒言によれば『著者は日本に居たこともなく、又日本人と對話したこともなく、唯其國から歸へつた人々から和漢字の書籍若干を得、漢語の知識によつて此書を成すに至つたが、文字の書寫は一支那人に託し、且つ植民地で印刷に不便を極めたから、總て意の如くならなかつた』とある。此語學書の事は「六合叢談」第四號にも見えてゐる。

別にメドハーストの編輯で天保六年に出版した左の語學書がある。

支那朝鮮日本三語對譯簿

Translation of a Comparative Vocabulary of the Chinese, Corea & Japanese Languages.

一八三五年　バタヤヤに於て印行（八折形）

此書は主として時季に關する各語の對譯を對記したもので、朝鮮語は朝鮮版の「倭語類解」を採り、是れは支那紙二つ折を用ひてある。此書前記語彙よりも稀有にして多く存在せず、余は先年アーネスト・サトーの舊藏を手に入れて珍重して居る。

メドハースト（一七九六―一八五七年）はロンドンの生れで、支那及び東印度派遣の宣教師となり、一八三〇年代永く支那に在留し、漢學に通じ、英譯數部あり。其事蹟はプール著「バークス傳」L. Pool: The Life of Sir Harry Parkes; pp 5, 126, 127; London, 1894）等にも散見す。曾て日本にも來らんとしたが果さなかつたと云ふ。

日本人に直接したことのない外國人、殊に遠西の人に取つては、此國の言語を研究するの困難であるのは勿論ながら、安政五年（一八五八年）開港條約締結の爲め渡來した英使ローフド・エルギン一行の經驗では、日本語を習ふは、支那語を學ぶに比すれば遙に容易なりと、其紀行に言つてある。（L. Oliphaent: Lord Elgin's Mission to China & Japan: II, pp 182-3; London, 1859）

日本の語學と文字に通じたフランス人ローニー等

フランスの東洋學者の中で、夙に日本の事物を研究した人の最も著しきは、レオン・ド・ローニー（Léon de Rosny）である。此人は一八三七年（天保八年）の生れで、年少より東洋知識を蓄へ、日本・支那・朝鮮の語學其他アメリカの古物に關する著編甚だ多し。

按ずるに、パリの東洋語學校の官設は早く一七九五年にあれども、最初は所謂近東卽ちアジヤ西方二三ケ國の語を教習するに止まつた。其日本語を學課に加へ、之が教授を受け持つたのは、ローニーに始まると云ふ。蓋し、一八五〇年代（安政年間）以後の事であらう。そして幕末日佛の交際殊に親密を加ふるに隨つて、自ら學業を擴張することとなつた。

前述の如く、ローニーの日本に關する著編甚だ多く、之を列擧し難きにより、今玆に其語學書の中殊に珍らしいものを記することとする、そは日佛對譯會話書で、其表題を譯せば左の通りである（筆者所藏）。

日本語會話案内

Guide de la Conversation Japonaise.

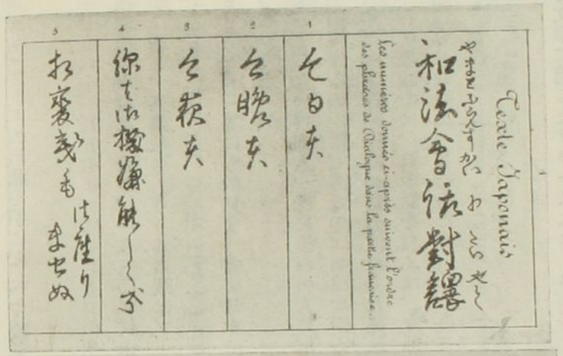
江戸用語發音。俗文及びカタカナ。

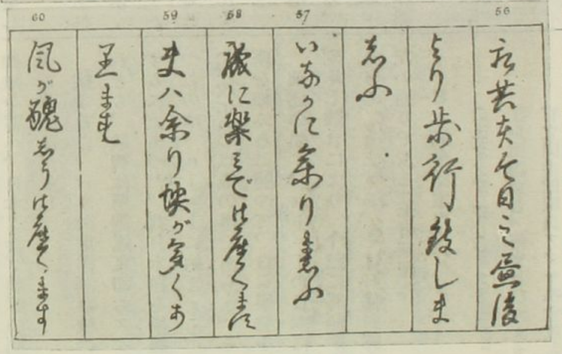
官立圖書館職員アジヤ學會並人種學會評議員、北米聯邦東洋學會員等レオン・ド・ローニー著。

一八六七年　パリ刊行（八折形）

此小册子は、日佛語對譯の部五十六頁と日本語の部三十二頁とより成り、前者はローマ字で綴つた會話の各日本語句の下に各佛譯を入れ次に日本の度量衡を說き、後者には平假名交り御家流に似た日本文と全カタカナ文で前と同樣の語句を記し、其末に當時の日本の金銀銅通貨を圖寫してある。

此册子の日本文字は皆ローニーの手書で、筆蹟頗る巧みなれども、中には字形少しく崩れた所がないではない。卽ち、こゝに示す寫眞第二面五九に見える「快」の如き字は「ホコリ」、又六〇に見える「醜しう」は「オソロシウ」と讀





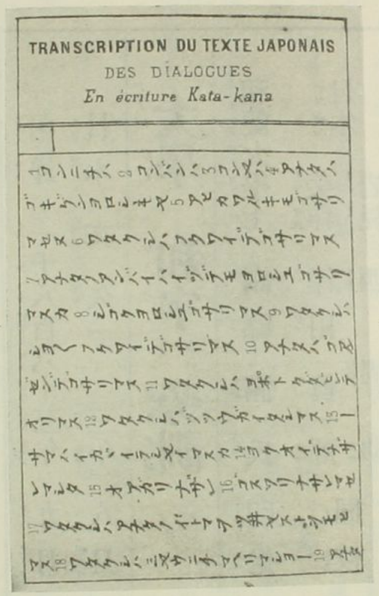
ローニーの自筆
（內三十一頁の一）

むべきことはカタカナ文と對照して始めて知ることができる。又語句に於ても日本人の使はぬものが見えてゐる。卽ち『を名と所とかきをくだされませ』「雨が降ましふ」「此肉はお好でなされますか」『日本字引は有用の物にして漢字と和字と御對譯するを要とす』『儞（ナンジ）は只今俗文を學ぶに時をお持ちなされませ』『何にお目に掛りましやうか』の類である。

右兩樣の日本文字は該會話案內の第二版に增補されたもので、初版には載せてない、何れも一八五九年以來續刊の「日本叢書」(Cour de Japonaise 二十餘卷)の中に收めてある。

が、一八六七年(慶應三年)に增補した所以は、此時德川昭武一行がフランスに在留する事となり、同時パリ博覽會に淸水卯三郎(瑞穗屋)等が參會したので、豫て日本の事物研究に熱心なるローニーは、親しく其言語と文字とを學習するの機會を得た爲めである（此事は在パリ日本公使であつた栗本鋤雲の記等を以ても知るべく、又慶應四年六月五日發行「橫濱新報もしほ草」にも、ローニーは『日本の言語に通じ東洋の習俗を愛す』とあるを以て察せらる）。

ローニーは更に進んでパリで日本文の新聞發行を企て、翌一八六八年三月廿四日（明治元年三月朔日）を以て「よのうはさ」Yo-no-ouwasa と題する新聞紙（八折形十二頁）を刊行した。此題號と所載文章とは、其數年前からかながき文を首唱し、且つ實行した淸水の指導に由つた事は毫も疑ひない。惜いことには此新聞は五年後に出たサンマースの「大西新聞」と同じく、一號限りで發行を止め、此「よのうはさ」第一號さへも今は其存否を詳にせず、唯其記事の數節を引用した「もしほ草」など當時の新聞によつて、其內容の一部分を窺知し得るに過ぎぬ。



ローニーの自筆
（內三十一頁の一）

此新聞發行の年を、ウエングステルンの「大日本書史」に一八七〇年と記したのは斷じて誤りである。

ローニーは、飲食喫煙等に至るまで好んで日本の風習を眞似た外人中、最も早い方で、しかも未だ曾て其國を實見した事はないのである。此人の日本的好事癖 (Japanophile) は、明治時代に來て、大森の貝塚發見を以て內外に知らるゝアメリカの動物學者モーアス (Edward Morse) の謠曲に於ける、又歸化人小泉八雲の名で顯はれた文學者ハーン (Lafcadio Hearn) の衣食住に於ける、大正時代に來駐した米國外交官の夫人バーネット (Barnett) の和歌に於け

るとは同一視すべきではない。

以上記述の外、日本語學其他に關する數種の著編(一八五七年より七四年頃までにパリに於て發行)に關する事は既に「新舊新代」大正十四年二月創刊號に詳述せられてあれば茲には省略する。

ホフマンの文久元年版蘭・英・和對譯會話書

オランダは早くから日本との交通を繼け、長崎の歐洲貿易を獨占してるたから、同國人若しくは同國人と假稱して日本に來たドイツ人又はスウェーデンの學究があつて、有益の著述を爲したれども、オランダ人で稍學識あり、史傳に關する著述を遺した者はチチング(Titsingh)、フキッシャー(Fischer)、ポムペ(Pompe)等數輩に過ぎない。而してオランダ人にあらずしてオランダに居り、日本人との關係淺からぬヨハーン・ヨーセフ・ホフマン(Johann Joseph Hoffmann)は殊に注目すべき一人である。

西洋一千八百六十三年九月
日本文久三年八月

大學和字旁訓

和蘭大學士 副福滿氏印送
日本 美作津田眞一郎
岩見西周助 同校

ホフマンは一八〇五年ドイツ國ヴュルツブルヒに生れ、夙に支那學に志し、又シーボルトに就いて日本の言語文字を學び、一八六一年以來凡そ廿年の間に、日本語學に關する獨・蘭・英各語の著編でオランダに於て發行したもの數多あり、其東洋諸國の語學に通ずるを以てオランダ植民省の譯官に採用され、文久三年(一八六三年)日本の海軍術及び法政學留學生の該國に赴いた時通譯の任に當つたが、未だ嘗て日本人に接した事のないに拘らず、其能く日本の言語文字に達してゐたので、大に此等の日本人を驚かした。(此事は留學生澤太郎左衛門の記にも見ゆ)。

蘭・和語學に關する書はヘンドリック・ドゥフ(Hendrick Doeff)の蘭和辭書其他數種あれども、ホフマンは更に先年長崎の商館長であつたドンケル・クルチウス(H. S. Donker Curtius)原著の日本語學書を改竄增補して發行した、其題號「日本文典」の四字はホフマンの自筆である。

其他の編著數多あり、一々之を擧げ難いが、其中余等の最も注目すべきは三語對譯會話篇である。其表題紙の蘭・英兩語の文を和譯すれば左の通りである。

蘭 英 和 商店會話

植民大臣の公認を經て和蘭東印度政廳日本語譯官ドクトル・ホフマン發行。

一八六一年ハーク刊行 八折形横本(四十四頁)

價 一フロリン七五 三シリング

表題紙の裏面に蘭文を以て『支那日本兩國の文字は植民省の活字を用ゆ』とあり。其緒言によれば、此小册子は安政六年卽ち一八五九年長崎發行の英和對譯の商用語篇に基いて更に蘭語を加へたとあり。所載參考書目九種の中にバタギヤ版シーボルト、パリ版ローニー、ライデン版クルチウスの各語學書及びロシヤ版ゴシュケウキチ橘耕齋共編の「魯和通言比考」等を擧げてあるのも注意に値する。

オランダ版和訓大學

前記商店會話と同じくホフマンの編輯に成れる元治元年ライデン版の「大學」あり、其蘭・英兩文の表題を和譯すれば左の如くである。

大學 Ta Hio of Dai-Gaku.

漢文 附和訓

ドクトル・ホフマン編

一八六四年 ライデン刊行 八折形 第一 二一葉 第二 一六葉

其表紙の裏面には漢和兩文字を以て題號を記し、而して植民省の活字を以て印刷したとある。其全面を縮寫すれば前頁に寫した通である。

其第一册には漢文にカタカナで和訓を附し、全編十章を載せ、第二册には蘭・英兩文を以てカナの讀み方を說明し、次にローマ字綴りで全編和訓の通りに記してある。然し少しも本文の意義を解說してはない、唯編者の序文に於て此大學は支那の經典四書の第一で、「中國」のみならず、一般東洋の文化は支那文學の影響に由り、其道德並に政治・敎育の基礎となつた、此原文は翻譯で久しい以前からヨーロッパに知られたれども、今此編輯は原文の爲めでなく、唯日本の文學の標本を供して以て翻譯(和訓)の體裁を示す爲めである』との趣意を述べてゐる。

巻末に於て津田眞一郎(眞道)は草體國文を以て、西周助(周)は漢文を以て、此册子は日本版本によつて活字で印刷し、兩人校正の任に當つた事を記してある。

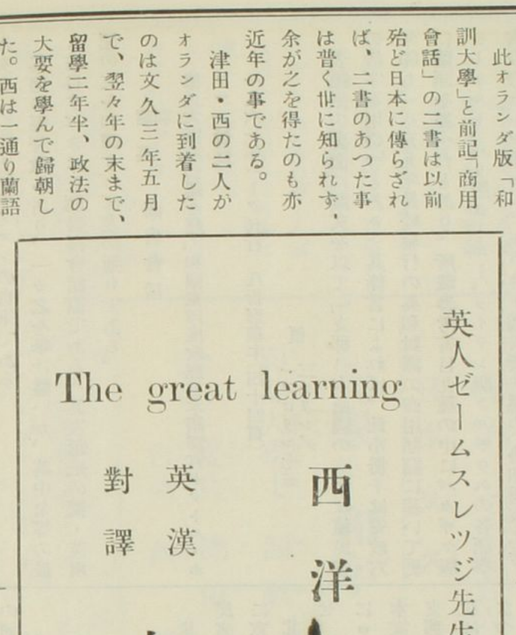
此オランダ版「和訓大學」と前記「商用會話」の二書は以前殆ど日本に傳らざれば、二書のあつた事は普く世に知られず、余が之を得たのも亦近年の事である。

津田・西の二人がオランダに到着したのは文久三年五月で、翌々年の末まで、留學二年半、政法の大要を學んで歸朝した。西は一通り蘭語に通じ、一八六五年ライデン版リンドウ(Lindau)譯「日本紀行」にも蘭文の序を書いてゐる。

英漢對譯「大學」

漢籍「四書」の東洋諸國に甚だ尊重された事はホフマンも言ふ如くで、日本に於ても舊時代にあつては、むづかしい「大學」を小學の兒童に對し其意義を解することなく『初學德に入るの門』として唯之を素讀せしめた。されば何人も此書を知らざるはなく、明治五年には英・漢對譯の「大學」の翻刻も出た、其表紙は上の如くである。

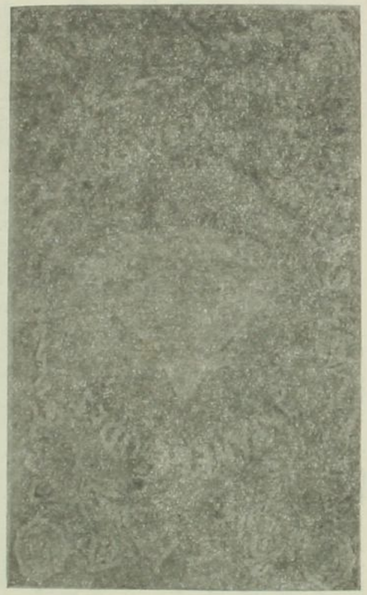
右「英人ゼームスレッジ」とあるはジェームス・レッグ(James Legge)の誤音たることは云ふまでもない、卽ちスコットランド出身の宣教師で



筆者所藏

一八三七年より一八七三年までの間マラッカと香港に在り、一八六五年七月(慶應元年六月)支那人と共に長崎に寄つた事がある。歸國の後オクスフォード大學の漢學教師となつた。此人は支那の經書廿八卷を譯註したので名高い。

明治の初、英語學の學習盛んなるに隨つて、右レッグの英漢對譯「大學」の翻刻が發行され、其書の卷首と卷末に「東京關吉孝譯、大和屋喜兵衛發兌」とあり。此書は一八六一年の原書を採り、漢文に訓點を加へ、英文にはカタカナで發音を附し、各語句の下に各相當のカナ交り譯語を附す。其發音の誤り多きことは明治二年慶應義塾出版「西洋旅案内」に附した英語篇と同樣のもので、今日よりも遙に甚しい。當時は英語の學習尙ほ搖籃期であつたれば、其未熟の程度も能く推察し得らる、況してや安政五年(一八五八年)五國條約締結の頃には英語の初歩にさへ通ずる者が無かつたのは、ローフド・エルギン支那及日本奉使記」L. Oliphant: Lord Elgin's Mission to China & Japan; Edinburgh, 1859)にも見える通りである。



英譯「百人一首」表紙
文字は字マンサスーマン筆

日本の言語と文字に通じたサンマース及び其他

英譯「百人一首」

安政年間開港の後數年ならぬに早くも横濱に渡來して日本語を學んだのは、米國宣教師ブラウン(Rev. S. R. Brown)及びヘバーン(Dr. J. C. Hepburn)等で、それ〴〵會話や辭書を編輯し、又本國に居り、或は日本に來り、此國に關する書册を著した人はあるが、日本の文字を學んだ人は甚だ少ない、それは勿論非常に難かしいからである。之を學んだ僅の人の内でローニー、ホフマンの外、英人ジェームス・サンマース(James Summers)を以て最も優れた者

の一人とする。

サンマースは年少支那に赴いて其言語・文字を學び、英國に歸つてケームブリッジ大學キングス・カレッジで支那語教師となつた、日本の言語文字に熟達した第一人者であつたアーネスト・サトーは最初其生徒であつた。サンマースは後に英國印度省圖書館に轉職し、一八六三—五年同館主任ロスト(Dr. R. Rost)と共に支那及日本寶典(Chinese & Japanese Repository)を逐次發行した。同雜誌一八六五年廿四乃至廿九號にサトーの寄稿に係る市川渡(清流)の原本「尾蠅歐行漫錄」の英譯 Diary of an Attendant of the Japanese Embassy to Europe in 1862-63)を連載してある。

時に慶應元年英國に赴いた長藩士南貞助に逢ふてサンマースは更に日本の言語・文字を練習するの便を得た。南は在留數年の後歸國し、明治初年には鮫島尙信等と共に外國官權判事(外務書記官)に在職したことがある。

一八六六年ヂッキンス(F. V. Dickins)の編輯挿註した英譯「百人一首」の刊行あり、元は當時日本に來た海軍士官の英譯があつたのを校訂したので、之にサンマースの關係した事は、ヂッキンスの序文中にサンマース教授が助言を與へ、且つ日本字原文を筆記したことを述べてあるので明かである。

そして卷末に添付した日本字原文の初頁に左の如く記してある。

英國京都倫敦印刷

百人一首

丙寅年十一月　申雅客筆

右「丙寅年」とあるは慶應二年卽ち一八六六年に當る、「申雅客」とあるはサンマースの語音の支那音に近い「申」(レエン)を取り、ジェームス卽ちヤコーブの音によつて「雅客」(ヤコー)としたので、其自筆を石版にしたものである。本文の歌句は草體に平かな交りに書き、字體稍崩れた所もあれど、外人としては寧ろ上手の方である。

其後一八七〇年乃至七三年にフォーニクス(Phoenix)と題する月刊雜誌を發行し、日本その他東洋諸國の記事を載す。斯くの如く日本の事物に趣味を有したサンマースは遂に日本渡來の機會を捉へ、明治六年開成學校(後の東京帝國大學)に

聘せられ、同九年まで在職し、退任の後其子と共に英語の教授に從事した。實に明治前後に於て日歐文學を互に紹介した功勞者中屈指の人である。

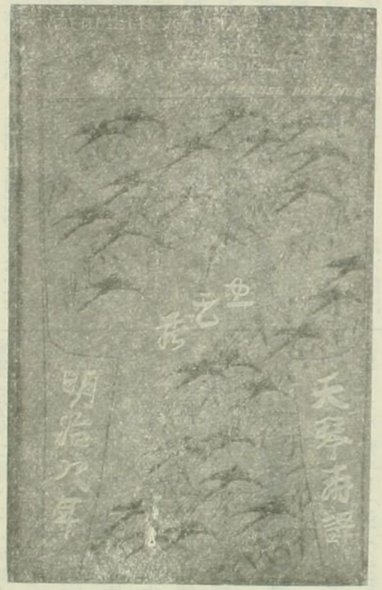
右以外サンマースに關する事は「新舊時代」大正十四年二月創刊號に、南貞助の事は、「明治文化研究」昭和二年十月號に記されてあれば茲には省略する。

歐語譯本「忠臣藏」

赤穗浪士復讐の事は「はらきり」の語と共に夙に西洋人に知られ、明治の初東京英國公使館書記官であつたミットフォード卽ち後のリーズデール卿(Mitford, Lord Redesdale)の有名なる「舊日本叢話」(Tales of Old Japan)が一八七一年に出でゝより普く東洋關係讀書人の注意を惹き起し、依て「忠臣藏」の歐語各譯本も前後數種發行あつたが、就中ヂッキンス(F. V. Dickins)の英譯「忠臣藏」は最も趣味に富む。其表紙と表題紙に記する日本流の文字は當時在東京サンマースの筆跡で、ヂッキンスを「天琴壽」と音譯したのも其考案に由るかと想はる。此書の概要を擧ぐれば左の通りである。

忠臣藏(表紙と表題紙の日本文字)

天琴壽譯(表紙)



英譯「忠臣藏」表紙
天琴壽譯とあるはヂッキンスの音譯

明治八年(表紙)一八七五年 横濱版

元來名高い「假名手本忠臣藏」の淨瑠璃原本は竹田出雲及び其門人の共作に成り、寛延元年の初版あれども、英譯本は改作「繪本忠臣藏」に據り、木版挿畫二十九も同書より其儘翻刻して、孰れも日本紙を用ひた、畫版は東京の木版職人に製造せしめたのである。卷末に日本俗樣文で「忠臣藏」大序の書き出し『嘉肴ありといへども食はざれば其味を知らず云々國治てよき武士の忠も武勇も隱る云々』の名句一枚を原文字のまゝ覆刷してあるのは面白い。附錄として日本音樂の大要を說

き、謠曲「高砂」の文句の英譯を添へてある。其後ロンドンで重版したが、此書も版畫等は同樣である。

ウキン版本の日本文字と圖畫　其他歐語譯本

昔時ローニー、ホフマン等の外、日本語に通じ、日本文字を書き習つた者は、慶應年間、幕府の陸軍に雇はれたフランス人シャノワンあり、其字體を見るに巧なりとは云ひ難く、ローニーに及ばざること遠し。又オーストリヤ人クードリアフスキー（Eufemia Kudriafsky）あり、一八七四年ウキン刊行の「日本に關する四講話」（Japan. Vierträge）の表題に記する「日本」及び「千八百七十四年」並に「太神宮」の文字の如きも亦巧手にあらず、其卷首の題詞に在ウキン日本公使館一等書記官渡邊洪基（とものぶ）夫人に獻呈する旨をドイツ文で記しあり、且つ其頃三等書記官本間清雄もウキン在勤であつたれば、此等の人々より日本文字を學ぶの便を得たであらう。此本間は卽ち前名本間潛藏で元治慶應年間に播州彥藏と共に海外新聞を發行した人で、明治の初に外交官となつたのである。

前記「日本に關する四講話」には表紙と表題紙に日本畫工の筆に成つた木版畫を挿入しあり、或は覆版ならん。此外クドリアフスキーの日本に關する記事數編あり、其頃ストットガートで發行した雜誌「外國」（Ausland）の中に見ゆ。

*　*　*

其他歐語譯本の中、有名にして難解と云はるゝ「源氏物語」に抄譯と全譯（續刊）とあり。同書の如き古代の貴族の情樂の醜態を巧妙に描いたものは、後世の爲永春水の敎訓の名に隱れて低級遊民の放蕩の有樣を寫したものと異ることなく、譯者は必しも之を古典的名作と鑑賞したこととは認め難い。其他「竹取物語」「方丈記」等も早く譯本が出た。又神道・宗敎に關する譯本も尠くない。就中佛者の低級愚民を相手にする變妙な因果說や、奇怪の應報談など、でたらめまでも譯したのは唯閑文士が面白半分の閑譯筆に過ぎぬであらう。

歐文日本書籍誌—三種連接

日本に關する特殊の歐文書籍誌はシーボルト（F. v. Siebold）、コルヂエー（H. Cordier）等の書目あれども、完備の點に於ては次に擧ぐる三種を以て第一とする、三種の書は年代に隨ふて前後相連接するものである。凡そ書籍誌の如きもの、編撰は人の知らぬ勞費多く、しかも相當に酬ゐらるゝことなきに拘らず、日本人の爲すべき事で未だ企てなんだ此じみな業を爲し遂げたのは、實に學界に於ける功勞偉大なりと稱

揭すべきである。

第一の書籍誌はフランス人レオン・パージス（Léon Pagès）編輯のもので、其概要は左の如くである、

〔佛文〕**日本書籍誌**　（Bibliographie Japonaise.）

一五五二年より一八五九年に至る。

前公使館附（Ancien Attaché de Légation）

レオン・ド・パージス著。

一八五九年パリ發行。

其表題紙に「前公使附」とあるは、一八四〇年代在支那フランス公使館に在勤した事を指す、在勤中漢學を習つたものと想はる。

右書籍誌は第十六世紀以來、三百餘年間に出で、ヨーロッパ各國語を以て書かれた日本關係の圖書を年代を逐ふて、凡そ六百五十八項に分つて列擧したものである。該書の範圍に屬する群書は之を網羅して殆ど遺漏なしと云つても可なりであるが、尙ほ次に記する英文書籍誌の第二卷の末尾に補遺を載せてある。然るに昭和二年京都覆版のパージス書籍誌に此補遺を缺略したのは不便である。

此書籍誌の外パージスの支那及び日本に關する著編數部あり、就中其「日本クリスト敎史」は最も史界に知らる。其他語學書等あり。此人は一八一四年に生れ、一八八六年に歿した。

*　*　*

第二の書籍誌はドイツ人ウェンクステルン（F. von Wenckstern）の編輯で、初卷と第二卷の發行あり、概要左の如くである。

〔英文〕大日本書史（Bibliography of the Empire of Japan）（此五字を表紙に印す）

（附錄　パージス書籍誌）

一八五九年より一八九三年に至る。

一八九五年　ライデン發行。

同　第二卷　一八九四年より一九〇六年に至る。

【附錄】第一卷の追加及訂正。パージー書籍誌補遺。スウエーデン文日本關係圖書。

一九〇七年　東京發行。

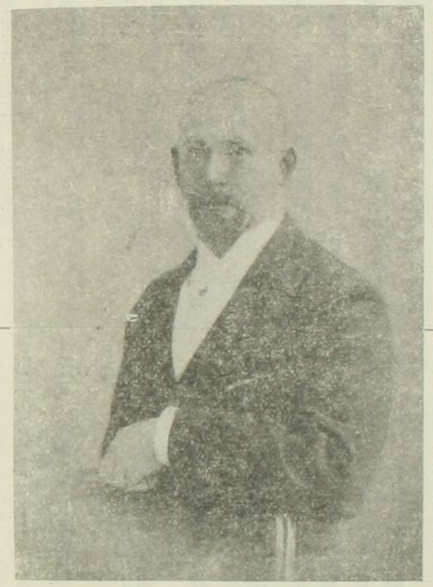
右第一卷はパージスの書に繼續するの目的を以て編輯したもので、第二卷も同く各廿三部に分類し、ロシヤ語の書を除くの外ヨーロッパ各國語で書かれた日本關係の圖書の題名を網羅してある、各書の題名は原書の儘で、概して解譯のな

いのはバーゼースの書と同様である。

第一卷の緒言中『過去數十年の間、東洋で日本國民ほど西洋人の注意を喚起した國民はない、其國民性たる物事曉りよく、資質勇敢にして和氣に滿ち、藝術に富む、眞に東方のヨーロッパと稱すべし云々』と筆を極めて稱讃してゐる、日本人に取つては聊かくすぐつたい氣がせぬでもないが、此書編述の明治廿八年は日本が支那に捷ち得た頃であるから、斯く讃辭を吝まなかつたのも無理はない。

更に奇とすべきは第二卷の發行も亦日本がロシヤに對し戰勝を得た直後である。此頃ウェンクステルンは熊本高等學校の教師となつて居り、其在留中に編輯を畢り、神戸のジャパン・クロニクル社で印刷したのである。

編者ウェンクステルンは元來ドイツ人であるが、英語に達し、一九〇〇年前後にはロンドンの東洋書專門の書肆ケガン・ポール社の一員であつた。筆者が曾て同地に遊歷中、後の京都大學教授武田工博と共に之を其事務室に訪ふた時（一九〇五年二月）は恰も第二卷の編輯中であると聞いた。其後日本に數年間在留し、去つてオーストラリヤに赴いたが、偶ま病を獲て其地に歿した。



獨逸文學博士オスカー・ナホッド氏

「日本書籍誌」新編の撰者

以上二種の書籍誌は其範圍に屬する書目を網羅するに於て苦心した跡を窺ふに足ると雖も、尙ほ少しく遺脫を免れぬものがないではない、現に余が少ない架藏の史傳中の古書稀籍でも脫漏したもの十餘部を發見した。

＊　＊　＊

第三の書籍誌はドイツ人オスカー・ナホッド（Dr. Ph. Oskar Naehod）の編輯に係る、其概要を左に記す。

〔獨・英文〕日本書籍誌 Bibliographie von Japan.）

全二册　一九〇六年より一九二六年に至る。

一九二八年　ライプチヒ及びロンドン發行。

此書は全編を十六部に分類し、書目通計九五七五項を數ふ。此書の特色はロシヤ人の著書に據つてロシヤ語の諸書をも加へたると、每書目一々番號を附し、索引によつて檢出するの便に供したことである。獨・英兩文の刊行とは云へども、其實は更に英文を以て改撰したものではなく、唯書中の題目・標記等を改めたのみで內容は每頁少しも獨文の原撰と異なる所を見ない。

編者ナホッドは明治三十三年に日本に來遊した、余が之と親接するに至つたのは此時に始まる、而して兩者を紹介したのものは實に余の外交史である。此篤學者が日本の歷史に趣味を有するに至つた動機は何かと聞くと、曾てモンタヌスの「和蘭東印度會社使節日本皇帝禮問記」（A. Montanus: Gesandschappen d. O. I. Maatschaij in Nederlanden aan de Kaisaren van Japan. Amst. 1669）を讀んで頗る興味を覺えた故であると云ふ。其日本に來たのは國狀實見と史料採集の爲めであつた。歸國の後「日本史」（ドイツ文）の著述に着手し、既に第三卷まで發行した。其第一卷の稿を起すに當り、余は恰もドイツに居たれば、其ドレスデン郊外の別莊に於て日々之が爲に日本の史傳を口譯して其助けを爲した事は序文に記してある通りである。こゝに掲げた寫眞は當時余に與へられたもので、裏面に記念の文を自書してある。

ナホッドは今齡七十餘、溫厚篤學の人で、加ふるに資產豐かなるを以て、專ら史學に從事し、能く日本書籍誌の如き大著を完成し得たのである。此著や歐文の日本關係諸書を檢索するに缺くべからざるもので、斯の學界に便益を供すること實に多大なりと言ふべきである。

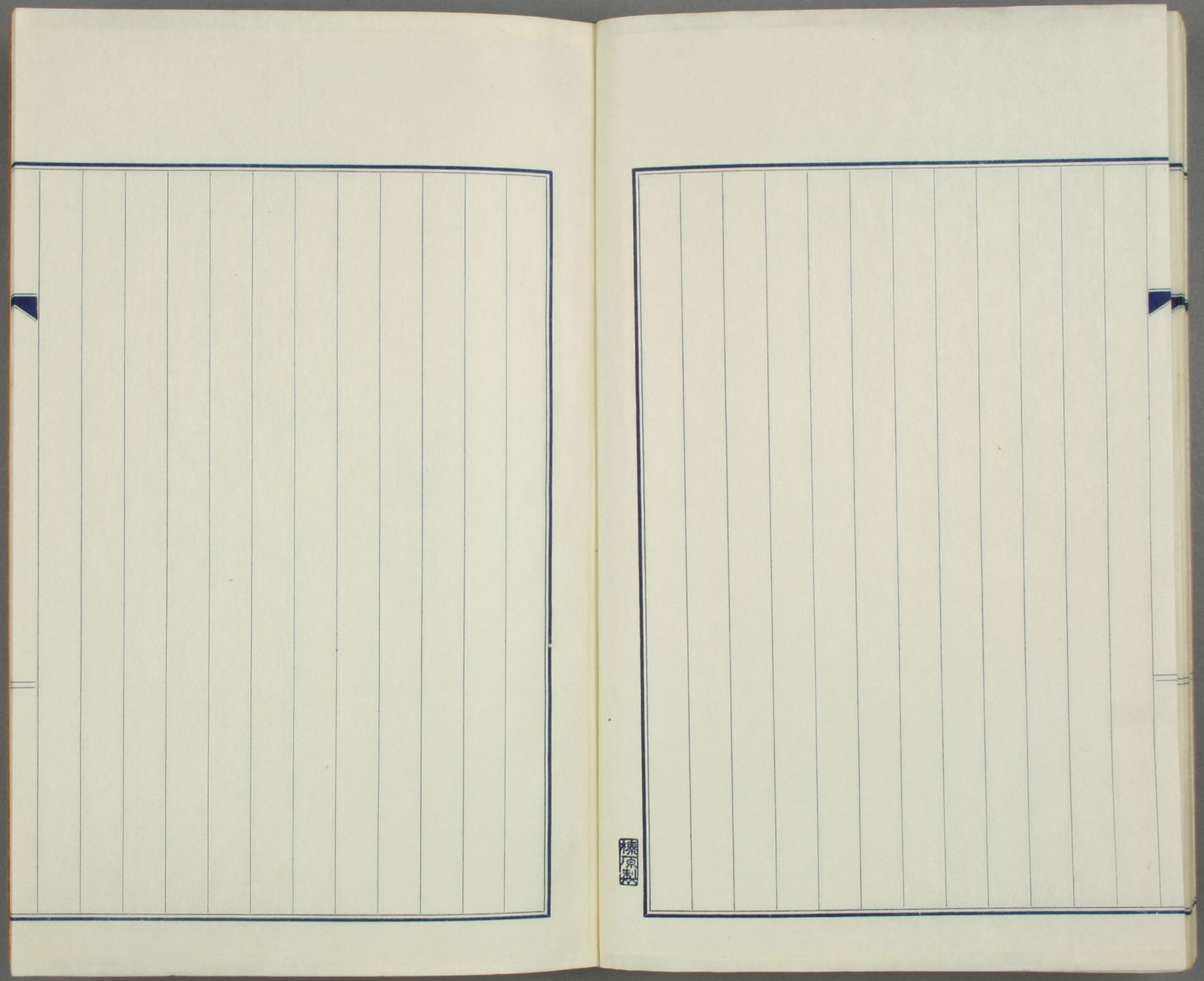
＊　＊　＊

日歐關係文學については以上の記述に止まらず、尙ほ言ふべき事多々あれども、紙數限りあつて此短篇に盡し難く、惜しき筆をばこゝに止め畢んぬ。（完）

追補

前號一七頁ピッツマイヤーのドイツ文譯「浮世形六枚屏風」を記した條の末に左の一文を追補す。

「浮世形六枚屏風」のフランス譯は一八八〇年代トゥレッチニ（F. Turretini）の編輯でジュネーヴに於て發行した雜誌「あつめ草」と姉妹篇である所の「晩採集（バンサイシウ）」第四卷に收載す、是はピッツマイヤーのドイツ譯から重譯したものだと云ふ。



以下
6丁
白紙

一絲國師筆　南禪斬猫圖

別府金七氏藏

東京はい原

閲覧室

榛原製